
運命に綴られた世界

秋藤 一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命に綴られた世界

【Nコード】

N7478P

【作者名】

秋藤 一二三

【あらすじ】

運命に綴られた世界。そんな世界で生きていく人々。自分たちの世界がそんな言葉で表されているなんて知らずに、その意味もまた知らずに・・・

そんな世界に運命を捻じ曲げ生まれてきた男の子、ヴァン。この子の存在が何を意味するのか・・・

魔法が存在する世界での、ヴァンと共に歩むお話です。

00：新たな運命の誕生（前書き）

こんにちは、こんばんは。

はじめまして、秋藤一二三です。よろしく願います。

小説を書くのは初めてとなります。よってこの作品は、所謂、処女作というやつになります。いや、他の方のと比べるとそりゃあもう酷いものかもしれませんが。

とりあえず、頑張って書きました。頭の中に描き出した話、妄想、想像、ヴィジョン、なんてものを言葉にするのは大変ですね。痛感しました・・・

では、このへんで。楽しんでもらえれば幸いです。

00：新たな運命の誕生

暗く、陰気臭く、謎めいて、儀式的な装飾が施されている部屋。窓もないその部屋の光源は何本ものろうそく。おそらくは地下室。それも特に深い場所にある。世界には、表には決して知られてはならない場所のようだ。

そこには4つの影。何かを囲むようにして立っている。4人は同じローブを着ている。黒く、装飾もない布が全身を覆っている。その4人を区別する手段は声しかないだろう。

「魔法陣の用意は終わりました：これで術に対する準備は全て整いました。」

若い男の声だ。しかし、この声には感情というものが感じられない。

「本当にやんですかい？これは禁忌も禁忌、そのうえまたも禁忌を重ねる大事なんですぜい？オレとしちゃあ、こここそ”王とはなんなのか”ってのを考えますがねえ。」

さっきの男とは違った声だ。なんともだらしない言葉づかい。へらへらと。だが感情のある明るい声だ。

「黙りなさい、ラウ。全ては陛下の決めること。私たちは意見を述べる資格はないの。」

女の声。言葉づかいも、声もキツイ感じだ。

「まあ、いい。お主らにはここまでよく働いてもらったのでな。そのような些細なことは気にしとらんよ。————ムーよ。この魔法が成功する確率はどれくらいかの…」

「およそ5割かと。」

即答。

感情のない声が老人の声に答えた。

「ふむ……これは…この魔法が成功すれば我が国には滅びの運命を辿ると言われた。しかし……しかし、我も国王である前に人の子…

私の立場を考え、国民を優先した思考で物事を考えるべきなのは分かっておる……だが、やはり……」

沈黙。

そして老人は視線を落とす。その先にあるものは台の上に横たわる赤子。生まれて間もないくらいの子。声は出してない。深い眠りにについているようだ。そして、拘束具に囚われている狼に似た獣。青と銀色の毛を纏い、その姿には何人も寄せ付けない風格がある。しかし、本当の意味で他者を寄せ付けないのはその目だろう。ギラギラと、自分を困んでいる者への憎しみか——いや、その目に籠もった感情まではわからないが、明らかに誰が見ても怖気づいてしまう目だった。

「……始めてくれ。」

その老人はその場を離れた。声だけでは感情は判断できなかった。「始める。」

ムーという男が言った。狼のような獣の額に手を当て、何かを言った、いや唱えた。するとすぐに獣は目を瞑った。それを確認した後”メス”のようなものを手にとった。どこから出したのかはわからない。そしてそのメスで獣の腹部を裂く。

出血。

だが、なぜかはわからないが出血量はひどいものではない。むしろほとんどない。動く心臓。動く内臓。動いていることを確認する。そして次に男の子の方へ手を伸ばす。そしてまた切開。先ほどと同じく出血は微々たるもの。動く心臓。動く内臓。動いていることを確認。

「以上だ。」

「んじゃあ、オレの番かな。」

へらへらと、ラウと呼ばれた男が言った。腕を伸ばし、肩を解し、首を回す。そして一呼吸。

「っおっし。」

目が変わった、ように感じた。これは気迫によって感じるものだ

った。

ラウは男の子の心臓を手にとる。よく見ると心臓には何やら印が刻まれてある。刺青のような、黒い模様が。

へらへらと口数が多い方だったラウは一言もしゃべらず、その印を見定める。

集中。

意識をその印ひとつに注ぐ。そして、空いているほうの手の指、右手の人差し指と中指で印を抑える。その瞬間、炎のような、ゆらゆらと漂う黒い煙が昇った。

無表情。

だんだんと、黒い煙は治まる。

「……ふう。完了したぜ。」

ゆっくりとラウは心臓から手を離す。

そして3人は台を中心にし、自分たちの位置を修正した。地面には魔法陣。自分たちの立つ位置に小さな円が描かれている。上から見てちょうど正三角形のような位置取りだ。各々からオーラが出てきた。雰囲気とかではなく、しっかりと目に見える、力のあるものだ。色はそれぞれ違うが。そして、3人は顔を見合わせ、頷き、同時に叫ぶ。

「心身転移《ラン・デュ・オリソア》！」

魔法陣から光が、各々のオーラは光が増す。風が出てきた。魔法陣の中心、台を中心に渦巻くように。最初は弱く、次第に強くなっていた。音は風の音だけだ。轟々と。ローブが靡く。しかし、なぜかフードは飛ばされない。風が渦巻いて、渦巻いて、だんだんと中心へ、台へと集束していく。集束。とうとう風の渦が囲むのは男の子と獣の体ふたつになった。そして：

バチンっ！

破裂音。

その音はさっきまでの風の音よりも大きかった。

そして、その音と同時に風は止み、魔法陣、3人の者たちからの

光やオーラは消えた。

そして、2つの体の動きも消えた。

「ど、どうなったのだ?…」

老人は言う。恐怖と希望の混じった声で。

しかし、3人は答えない、いや答えられないのかもしれないが。ビクンッと獣の体が動いた。すると、体全体を纏うように光が現れ、その光が獣の心臓の上に球体状に集まる。体を纏っていた光は全て球体になった。体には光は無い。そして、その光はゆっくりと、ゆっくりと男の子の方へ動き、男の子の心臓の上に位置し、止まり、ゆっくりと、ゆっくりとその子の心臓へと吸い込まれた。

……沈黙。

「ここからは、私の番ね。」

女は言う。ラウと同じように手を心臓に当てる。目を瞑り、何かを唱える。またも沈黙。そして……ドクンッと男の子の心臓が動いた。

同時に鳴き声が響く。

何かを悲しむように…

何かを喜んでいるように…

何かを絶望しているように…

何かを切望しているように…

「無事、終了したわ。陛下成功です。」

国王は答えなかった。

こうして、運命が狂った。異分子が、希望が、厄災が、英雄が、悪魔が、その他多くの役割が生まれてしまった。一体どこへ向かえばいいのか、何をすべきなのか解らないままに…

00：新たな運命の誕生（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
これからも頑張って書き続けます。
今後ともどうぞよろしく。

00：ヴァン・ステイルフォード（前書き）

こんにちは、こんばんは。

よろしくです。秋藤です。どうか温かい目で見てください。
今回もまだ序章的な扱いになります。

では、このへんで。楽しんで頂けたら幸いです。

00：ヴァン・ステイルフォード

木漏れ日。

暖かい風。

小鳥の囀りさえずり。

気持ちのいい、清々しい天気、朝。

ここは森の中。近くに川が流れている。川辺。

いまおれは1人、食料と薪たきぎを探してる。薪の方はもう集め終わっているのだけど、問題は食料の方だった。まあ、たいした問題ではないのだが。

「うーん、今日は何にしようかな……昨日は肉食ったからな……」
川を再度確認。

「やっぱり、魚かな……んじゃ。」

服を脱ぐ。羽織っている青色のマント。マントと言っても生地は薄いので防寒対策のためではない。続いて衣服。黒をベースとした、模様が付いたものだ。

川の深さはそれほどでもないが、約6歳の体では完全に体が浸かってしまう深さだ。川幅はざっと5、6メートルか。川のちようど真ん中に石が出ている。石というより、岩か。

そこに向かって跳ぶ。少し助走をつけて。
シュタッ。

着地。

そこから川を覗き込む。

4、50センチほどの魚が目映る。それと同時に自分の顔も。もうこれまで何度も見てきた顔だが、やはり他の”人”とは違う。髪の毛の色。黒髪をベース。だが、青と銀色の毛が混じる。

そこまでは”染める”という方法があるから、さほどの問題ではないが。もちろんこれは地毛だ。

やはり、決定的に違うというのはやはり……目の下にある青と銀色

の毛だ。髭ではない。もちろん眉毛でもない。

映っていた違いというのは、それだけだが、他にも違いはある。

まずは尻尾。色はもう言うまでもない。体のいたるところに、斑に、毛が生えている。そして普通よりも伸びた爪、牙。

そう、おれの身体は人と言うよりも獣に近かった。

まあ、そんなことはもう慣れっこなわけで。

魚。

見定め。

跳び込む。

バシヤッ。

手には標的にした魚があった。

「おっし。これで朝飯も手に入れたわけだ。」

「ヴァン。おーい、どこいった？」

やさしい声。兄の声。尊敬する者の声。

声と共に姿が見えた。

おれと同じマントを着ている。マントの色は銀色で、下の衣服の

色は深紅。髪の色は黒。

おれは川からあがる。

「おお。こんなとこまで来てたのか。どうだ？朝飯と薪、準備できたか？」

「うん、ジル兄。いまちようど獲ったとこ。今日は魚にしたよ。」

「ん、美味そうだな。風邪引くと大変だからな、薪かせよ、火点けてやるから。」

ジル兄に渡す。

ジル兄は腰に提げているウエストバックをあさる。

あった、と小さな袋を取り出し、その中の粉を薪に振りかける。

そして、下に落ちている小石を拾い上げ、その小石と薪を擦る。

すると火がついた。爛々《らんらん》と輝く火だ。

「おし。ほれ、テントに戻るまでこれで体乾かせ。」

「ん、ありがと。」

そう言っておれはジル兄と一緒にテントへ帰る。

帰路。

おれが切り出す。

「…でもさあ…」

「…？、なんだよ？」

「なんで魔法使わないのになって思ってたさ。家を出てからもう2年近く経つのに、ぜんぜん魔法使わないじゃん。…教えてもくれないし…」

「いやあ、使ってはいるよ。最低限ね。持ち物運んだりとかはさ。…まあ、教えてはないけどな。」

「でも、さっきのだってさ。火点けんのだって、魔法使えば、いちいち道具なんて使わなくてすむじゃん。」

「んー…まあ、できるだけ魔法ってのは使わない方がいいって思想の持主だからね、オレはさ。…それに、おまえ魔法が何なのかって分かってんの？オレの本読んでたのは知ってつけど。」

「うっ…」 『ばれてたのか…』

「そ、そりゃあ、知ってるよ。魔法ってのは”あらゆるエネルギーを魔法陣によって変換し、魔法としてエネルギーを放出する。”ってことだろ！？」

『覚えてやがった。しかも得意気。』

「じゃあ、その”あらゆるエネルギー”と”変換”ってのはどういう意味なんだ？」

苦い顔。そして、沈黙。

はあ、とため息が聞こえる。沈黙のままテントへ。

おれたちのテントに帰ってきた。淡い緑色のテント。

「んじゃ、きちんと教えるから。ここに座れ。」

小さなテーブルを挟んでおれたちは向かい合う。

「魔法ってのはな。まず知識がないと使えない。魔法陣を描かないと魔法が使えないからだ。」

「じゃあ、知識さえあれば誰にでも使えるの？」

「まあ、そういうことだ。それと、だ。誰にでも使える、知識がない者にでも使える魔法もある。これは、水晶のような鉱物を使う。まあ、形は様々だが大きさが魔法の力、いや許容量かな、まあそれに比例する。”フトロフ”と呼ばれている。まあ、最近発見されたばかりで希少価値はまだ高いんだけどな。……ここまで、解るか?”うん、まあなんとなくは…”」

「じゃあ、続けるぞ。本当はこれから話さないとならなかったかな。まず、この世界の魔法という概念は”エネルギー変換”だ。例に挙げれば物理的な衝突、風、熱などだが、生命力、心の力なんてのもエネルギーとみなし変換できる。これが魔法と呼ばれる由縁だ。そして、現在はほとんどこの生命力、心の力が源として使われている。その方が手間もかからず、便利で、即効性のあるものだからだ。が、まあ、これがおまえに魔法を使わせない要因なんだが…解るか?”まあなんとなくは…”」

「で、魔法の源の説明はそれでひとまずおいといて、次は性質だ。魔法にはそれぞれ性質があるが、まずは大きく分けてふたつ。”純魔法”と”心魔法”だ。ちょっと待て…”

ジル兄は紙と筆をウエストバックから取り出し、円をふたつ描いた。円の中にまた円がある絵だ。

「この外側の円に位置するのが”火”、”水”、”風”、”木”、”土”、”雷”、”理”、”幻”の8種の魔法。これが”純魔法”と呼ばれる。次に、その内側の円に位置するのが”聖”、”無”、”闇”の3種の魔法。これが”心魔法”だ。」

「性質は知ってるぜ。でも”理”、”幻”なんてのはあまり聞かないけど…それと、”純”と”心”の違いが…わかりません…”

「まあ、そんなに落ち込むなって。つな。”理”と”幻”ってのはここ最近に発見された魔法で、知らなくて当然だ。お前の読んだ本には書いてなかったと思うからさ。…確か、政府の魔法審団の1人が発明したって聞いたっけな…ああ、いやこの話はどうでもいいんだ。で、”純”と”心”だけど、これはまあ、あんまし違いはない。」

魔法は魔法だ。：ただ、言うなればふたつほど挙げられるな。ひとつは魔法の源、エネルギーの源が違うんだ。”純”の方はエネルギーならば何でも変換できる。と言っても、各々の魔法陣、制約、性質、色々なことによって、なんでもってのは無くなってくるけどな。”心”の方はその名の通り、心の力、心力しんりょくが源に使われる。んで、ふたつ目の違いは人との相性ってのかな：これもきちんと言明しないとならないんだが、人には扱える魔法の性質が限られているってのは知ってるか？」

「なんだって！？　いろんな魔法使えんじやないの？　火とか雷とかさ、色々さ？」

「そんなに期待してたのか：残念だけど、ほとんどの人間には1つの性質の魔法ぐらいしか使えないんだよ。」

ガクっ：と、うなだれる。

「なんで、なんでだよ……」

『ここまで落ち込むとは……　なんか可哀そうだな。』

「いや、まあ、これはあんまし期待しないで聞けよ。人は本来色々な魔法が使える才能はもってるんだ。」

「うんうん。」

『食い付きいいなあ：即答かよ。』

「ただな、普通はその才能の中のひとつの才能だけが突出してるものなんだよ。複数の性質の魔法が使える奴は何かしらその代償みたいなのが付きまといっているんだよ。」

「へえー。：使える奴はいるのかあ。」

『まあ、こうなることはわかってたよ、ほんと。』

「まあ、話を戻すぞ。おまえにとって重要なのはここかもしれないな。ここでの性質ってのは”純魔法”だけを指すんだ。”純魔法”ってのはな、自分が使える性質ってのは選べない、才能によって決められた魔法なんだ。だが、”心魔法”だけは自分の意志で、自分の心で選ばれるんだ。ただ、”心魔法”ってのは完全に習得するのは難しいがな。”純魔法”と合わせて使えば、単独で使うのより

は簡単かな。」

「へえー。じゃあ、頑張れば誰でも2つの種類の魔法は使えるのか。」

『まあ、その頑張るってところが難題なんだけど・・・まあいいか。』
「これで、源と性質ってのを話したからな、大まかな説明はこんくらいかな。詳しく話せば、魔法の性質1つとっても、使う者の才能によって同じ性質でも全然違う魔法になったりとか・・・まあいいや。」

おれの顔が興味を失いかけているように見えたのか、呆れられたように感じた。

「ここからは忠告、いやなんでおまえに魔法を使わせてないのかってことだ。もう、簡潔にまとめるぞ。おまえの体は獣神^{ゼオル}の子どもと共存しているかたちなんだ。」

「：前にも少し聞いたよ。」

「ああ、だからもうこれっきり。なにか余程のことがない限りもう話さないよ。：で、だな。いま現時点の状態ではおまえの心は獣神に負けている状態なんだ。」

「っ！：」

反論は遮られた。

「1つの身体に2つの心。なにもおまえに打ち勝てと言ってるんじゃない。おまえたちが目指すべき方向はただ1つ。共存だ。おまえにはある種の呪いの魔法がかけられててな：おまえがなんかの間違いで獣神の心を消したとしても、その呪いでおまえは死ぬ。獣神がおまえの心を消しても獣神の心がおまえの身体で持ち堪えられるわけもなく：死ぬな。」

刹那の沈黙。

「ただ、さっきも言った通り今は負けている状態。その証拠に身体に至る所に獣神の毛や特徴が現れているだろう？それが出ている限り魔法は使えない。いや、使った場合おまえのからだのバランスが崩れるんだ。そしたら、どっちに偏っても死ぬことになる：だから

使わせないんだよ。」

永久の沈黙、のように感じた。

ジル兄の感情は読めなくなっていた。同情なのか、怒りなのか、
憐れ^{あわ}みなのか、呆れているのか：

「……でも、それでも”フトロフ” っていうのがあるんじゃないのかよ
…それもだめなのか？…」

「確かにフトロフならおまえの身体には影響しない。使ったって問
題はない。」

「じゃあ、それを…」

「ダメだ。それはおまえの身体には直接は影響しないけどな。万が
一のこともある。説明はもう端折るけどな。おまえは一生その姿で
過ごすつもりなのか？ 今のおまえは成長期、この負けている状態、
アンバランスな状態はむしろ必然なんだ。おまえの身体は獣神の心
が入ってるせいかな、成長が早くなっているみたいでな、あと6年も
すれば、おそらくは普通の身体に戻っているはずだ。だから、それ
までは身体に余計な影響を与えたくないんだ。…解るか？」

「……うん、わかったよ。」

「まあ、おまえの気持もわかんないでもないんだがな。ここは解
ってもらえないかな。……んじゃ、これで話は終わりだ。いつも
通り稽古を始めるぞ。ああ、その前に飯だな。」

「んじゃ、魔法で調理を…」

コツンっ。殴られた。

これはおれの幼少時代の断片、1ページ、ひと時、出来事。

これっきりこの時代は魔法の話はなかったけども、稽古やら狩り
やらでとにかく体を動かしまくった。

戦いとは程遠い時代、まあ野生動物との戦いは幾度となくあった
が、人とはない。そして人との交流もあまりなかった。

まあ、幸せだと感じる時代ではあったな：

00：ヴァン・ステイルフォード（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

前書きにも書きましたが、今回も序章。

00と00、まあどちらの話もこの世界のことを知っていたただくための話です。

とりあえず詳しく述べさせてもらうとしたら、最初の方は新しい運命の、ヴァンの”誕生”の話し。

今回の話はこの世界の、魔法の”常識”のお話です。

読んでくださってありがとうございます。

次話は本編に入ります。また、まだ序章・・・っておちにはならないように頑張ります。

今後ともよろしく願います。

01..決意(前書き)

こんにちは、こんばんわ、おはようございます、おやすみなさい。
どうも、秋藤です。よろしくお願いします。

今回からやっと本編です。少し序章くさいと思われるかもしれませんが、あまりそことこの境界の認識が足らずすみません。

では、どうぞ、今回も温かい目で見てやってください。よろしく
お願いします。

01…決意

ガサッ。

おれは今茂みに潜んでいる。目の前にいる獲物に気づかれないように。

相手は身長約2メートル。全身黒くめ。手足には恐ろしい凶器だ。加えて口にも別の恐ろしい凶器を隠し持っている。

対するこちらは身長約1メートル50センチ。全身黒をベースにした衣服着用。両手には木刀。長さはだいたい同じで約60センチ。ちなみに手作り。これは確か34代目、”木刀丸”ぼくとうまる。残念ながら、他に武器はない。

だが、相手はこちらに気づいていない。今の状況は視獲的有利とでも言うのだろうか。まあ、そんな状態。こんな状況は今まで何度となくあった。

息を潜める。

集中。

今までの奴との戦闘の記憶が甦る。33戦0勝0敗33引き分け……嘘だ、33敗……

再び集中。

『過去は過去、今日勝てば帳消しだ!』

相手が向こうを向いた瞬間。

ザッ!

両手の木刀を左に引きながら跳び出た。距離はざっと2メートル。相手の後ろ足、左を目掛けて斬り抜く。

ガンッ!

ヒット。斬り抜いた力の流れ、言わば遠心力で体を回転。相手に背後を獲らせない。木刀を構える。

相手は少しひるんだがダメージは薄いようだ。こちらを睨み、唸り、跳びかかってきた。

この行動は予想の範囲内。だが、スピードは予想以上だった。
「うわぁっ」

ギリギリのところで躲す、いや躲しきれてはいない。右方向に緊急回避。バランスを崩して、転倒、一回転した。ケガはない。さすが構えながら状況確認。

相手の二撃目。さっきと同じ攻撃だ、ただの跳びかかり。
集中。

今度は躲す。方向はさっきと同じ、右方向だ。また構える。反撃はまだしない。

相手も冷静になったのか、こちらを睨むだけで止まる。

こちらも相手も間合いを測る。ふたりとも右に旋回。

睨み合い。

ジリっ。

汗が額を、頬を伝う……

相手の目がカッと力の籠もった目になった。その瞬間跳びかかってくる。

おれは右手の木刀を回転させ、逆手に持ち、あいての額目掛けて投げつける。と同時に懷に潜り込む。

ガンっ！

ヒットした。空中でモロに。相手はひるむ。今回ののはダメージ薄とはいかないようだ。

『おっし！』

左手にあった木刀を両手で持ち、左に引く。そして、ちょうど懷に入り込んだ瞬間。一気に体を回転させるように、まるで背負い投げをしているように、斬り抜く。

ザンっ！

あいてが跳びかかってきた力と、今の一撃が上手く合わさったのか、あいては空中で回転。背中から地面に突っ込んだ。

ダンっ！

呻き声が聞こえる。そして、動かなくなった。

決着。

「おっしゃあ！勝ったあ！」

これで、1戦1勝0敗0引き分け。最初の一手が卑怯だとは言わせない。

なんせ、相手は野生のクマなんだから。

勝利に酔いしれ、上機嫌で34代目”木刀丸 右近”を探す。

「えっと、確かこの辺に。」

ガサッと、何者かが動く気配がした。同時に嫌な胸騒ぎも。振り向く。振り向きたくはなかったが、生死に関わってくるので、否応なく、仕方なく。

「えっ—————」

そこには約2メートルの巨体があった。目はさっき見ていたものとは比べようもなく、遥かに^{どうもう}獐猛。

振り向いた方がいいが、動けない。無理だ。完全に気圧されている。唸り声。

しかし、こちらは悲鳴さえ出ない。

相手は跳びかかてきた。手に携えている凶器がおれの体に……斬っ！

クマが左に吹っ飛ぶ。

ザシャあ—————

「こんなところにいたのか。探すのに苦労したぞ。ほれ、大丈夫か？」
そう言って手を差し出してくれる。

ジキル・ステイルフォード。漆黒の髪。約180越えの身長。体は細見、といっても頼りないなんて思わせる体つきではない。歳は26歳だそう。銀白のマント、そしてその下に着ている深紅の衣服。右手にはおれの”木刀丸 左近”。

「あっ。」

差し出してくれた手に応え、体を起こす。

「ありがとう。ジル兄。」

「ん？ああ、まあたいしたことないさ。おまえは勝負には勝ってい

たようだったし、あそこからは殺し合いの領域だったからな。――
――それと、ほれ”木刀丸”。」

ちよつとにやついてる。

なんか、なんかむかつく。

「ん、ありがと。」

おれはクマの方を見る。5、6メートルは吹っ飛んでる。意識はないようだ。

「今日の昼飯は念願のクマ鍋だな。美味そうだ。じゃあ、帰るとするか。」

「うん。」

そして、ふたりは淡い緑色のテントへと戻る。

クマは当然ジル兄が担いでだ。クマなのに、人がこうも簡単に担げるものなのか？疑問が浮かぶはずだが、この数年間ずっと暮らしていればこんな疑問はもうなくなった。

戻ってきた。

「いやあ、ほんと強くなったよな、おまえ。魔法なしで、ただの剣術だけで野生のクマをのしちゃうんだもんな。これだから毎日稽古している甲斐があるってもんだよ。」

ぽんつと、おれの肩に手を置く。

「ありがと、ジル兄。――でも、結局クマは倒せなかったけどね。ジル兄が来なかったら……危なかったから。」

「だうから、あれは殺し合いの領域だったの。勝負には勝ったんだよ、おまえはさ。――でも、なんでオレが教えた剣技使わなかったんだ？まあ、あれは魔法有りの剣技なんだけどな。それでも、かなり有利に戦いをもつてけただろうに。」

「んーと、ずっと前に試したことがあったんだけど、おれの力じゃ上手いこと吹っ飛ばないし、ガードも、防いでもくれないからね……なんかやりにくかったんだよ。」

「そっか、おまえは流れでもってくからな。そこが強みであり、弱

みでもあるってことか。だから、ここまで強くなってるのに野生のクマにここまで苦戦してたわけか。」

「そういうんじゃないと思うけどな。ただ、弱いだけだよ。」

「まったく、謙虚だなあ……ここにこもって約7年。おまえはもう11歳か。ずいぶん長いこといたよな。——————剣技見てやるよ。」

ジル兄は座る。

突然だった。そして空気も突然変わった、ように感じた。

おれは頷き、両手の”木刀丸”を構える。

ジル兄から教わった剣技、壬鎖風流、全、玖ノ型。

集中。気が……気が高まっていく感じだ————

「候天！」

「巻き風！」

「隼霞！」

「愁濤！」

「拿晴！」

「恕鏑！」

「汽轍！」

「霧燦！」

「絶空寥期！」

————沈黙……

「……うん。上出来だ。————じゃあ飯にするかな。」

クマ鍋をつくっている、調理しているときはの会話はあってないようなものだった。

ジル兄は何か深く考えているようだった。

「おっし、できたな。じゃあ食べようか。」

「うん。じゃあ、いただきます。」

「いただきます。」

美味しい。美味いんだけど、味わえない雰囲気。

「…あのさ、ヴァン。明日、ここを出よう。」

「えっ！？修業は？稽古はどうすんのさ？それに、あと一年くらいここにいる予定だったろ？」

「もちろん稽古は他の場所に移ってもみっちりやるさ。」

『みっちり…か』

「それで、さっきの型を見たらな、もうここで教えることはなくなつた。というか、他の場所で教えた方が効率がいいと思つたんだ。」

「でも、おれはずっとここで暮らしてたからな、”普通の”人の生活なんてわかんないから、不安だよ。」

「じゃあ、ここから出たくないのか？」

「ん、いや…出たいには出たいよ。ただ、それと同じくらい不安があるっていうか。そんな感じ。」

「まあな、わからないでもないな。でもだ、もうおまえの体はほぼ安定してきて、尻尾も、体のいろんなところにあつた毛もなくなつて。牙も爪も、硬さは人よりも硬いが、それだけで見た目ももう変わらない。唯一獣神ゼオルの名残があるとすれば髪の毛にまじっている毛ぐらいだが、それは他の特徴よりも軽いものだろう？もう見た目を悲観する必要はないと思うけどな。」

「うん、べつに見た目はもう気にしてないけどさ。」

「まあ、嫌ってんなら無理にとは言わないさ。それに、他の場所に行つたつて魔法禁止は解かないつもりだしね。じゃあ、今日は午後の稽古はお休みだ。ゆっくり考えてみな。」

それでこの話題は終わった。あとはたわいない話。いつも通りの、日常の、話だった。

じゃあ、オレちょっと出かけてくるからさ。ここにいろよ。と、昼飯を食い終わって何をしようかと考えているときに言われた。これは初めてということではない。いつもは一か月置きくらいに本や消耗品などを町に買いに行くときに言われる。ただ、一週間くらいまえに行つたはずなので、なんだらうなと疑問は浮かんた。

「まあ、考えてもしようがないか。」

独り言。

「ここから出て、人がいる町とかに……普通の、魔法がある生活かあ。憧れてはいたんだよね。」

ただ、慣れてしまったこの生活に、平和で、安心できる生活と別れるのが……

『嫌なのかなあ。』

このままだと、なんにも答えが出なさそうなのであたりを見回す。本が何冊もあった。魔法の本だ。

「こいつらはもう何回も読んだな。」英雄伝記”、”この世界の魔法”、”魔法の魔本” e t c : それにしても英雄伝記は一番読んだな、特に”ザック・エクリスター”には憧れてたっけな。」自分の帰るべき場所を守る為ならば、この命を懸けて戦うのも悪くない！ だっけな。」

英雄伝記をパラパラと開く。

”デアル・ソー・マカリスター”

”らいでん雷電”

”ジュセイイン・ベルグ”

”ファントム”

”ザック・エクリスター”

偉大なる魔法使い、偉大なる戦士だ。

おれは、この人たちの歴史を読んで、育った。憧れて、羨ましく思い、おれもそんな風になりたいと思っていた。

「なれるわけないんだけどね。」

『でも、そんな風になれなくとも……憧れてた魔法の世界には行けるんだよね……』

「だったら、行ってみるべきなのかな！」

「ああ、そうだなあ。こんなところよりかは、いくらかマシなんじゃねえの？」

っ！！

警戒。

咄嗟に身構える。両手に木刀丸を持って。

周囲を見渡す。

気配はする。何か力強い気配。だが、どこにいるのだろう。わからない。

「おいおい。そう身構えんたってえの。でも、判断は正しいがなっ！」

気配が、後ろから！

激痛。

軽く5，6メートルは吹っ飛んだ。振り向けもせず、背中をまともにくらった。打撃系の痛み。

「つつう…」

骨は、折れてはいない。体が頑丈だったのか、相手がうまく攻撃してきたのかはわからない。

ただ、慈悲をかけている攻撃には感じられなかったが。

体を起こし、振り返る。

誰もいない…

「どこだよ！出てこい！」

「おいおい、わかってねえな。これはオレを探すゲームなんだよ。楽しめよ。獣人。なんつってなあ。」

……っ！！

今、なんて、なんで獣って…

ドンっ！

また背後。

「ぐはあっ。」

今度はさっきよりも痛い。

またもや吹っ飛ぶ。

吐血。

「なんだよ、なんなんだよ。」

『ダメだ。冷静になれ。このままじゃ、殺^やられる。』
周囲を警戒。

風の音。

風に揺られて音を出す木々。

鳥の囀り…

『いや、違う。』

周囲を再度警戒。

風の気配。

風に揺られる木々の気配。

鳥の、動物の気配。

…！突風の気配。

「そこだっ！」

体を右方向に反転。木刀丸を寄せガードの構え。

敵を確認。男。若い男だ。身長は180前後。黒いローブを着ている。ついているフードは被ってなく、顔が見える。金髪で、赤く斑に染めている。髪の後ろだけ特に伸ばしているようで、根元で結んでいる。

「あちゃあ。ゲーム終了おだな。まさか、こんな早く終わると思っ
てなかったぜ。案外きちんと育てられてんじゃねえの。」

「ゲームなんて関係ない…それに、なんでおれのこと知ってんだ！
？」

「おいおい、そう怒鳴るなよ。うっさいぜ。そんなこと、おまえは
知らなくていいんだよ。オレはおまえのために来たんじゃない、
オレのために来たんだからな…まあ、元気そうだなによりだな。よ
かった、よかった。あんだだけ苦労したんだから、そう簡単に死んで
もらっちゃあ困るからな。」

「うっさい！」

構える。壱ノ型。左足を踏み出し、体を振り、左手を引き下へ、
右手を突出し上へ。

———その型。空の顔を窺うように、相手の力量を測る。天
を突き刺すように迷いなく、人を式本の刀で突き刺す。壬鎖風流剣
技、候天———

男目掛けて

飛出し

全力で

突く――――

「候天！」

っ！？

『いない！？』

そこには男の姿は無かった。

「おいおい、今のはガチで危なかったぜ。どんだけ成長してんのお？まあ、別にかまわないんだけど。では、ここらへんで”格”の違いつてやつを見せてやりましょうか。」

左側から声がした。

「貫^{レスク}風。」

式の型。右手を上^{おお}に、顔下半分を覆うように。左手を下に、刀を相手に向け、刃を外側へ寝かせるように。

――その型。風の流れを見るように、懐へ来るモノを悟る。来たモノを己には触れさず、己を取巻くように、風のように受け流し、来たモノを式本の刃で切裂く。壬鎖^{みさなぎ}風流剣技、巻き風――――

「巻き風。」

男の右手からおれに向かって飛んできた風の塊を捕らえた。

左近で。

風の塊が木刀に乗った瞬間、体を回^{くる}転させる。左足を軸に。

そして男の方向へと向きなおし、風の塊を返す。

っ！？

またいない。

背中に指の存在：

「マジでかぁ。痛みで格の違いつてやつを教えてやるつもりだったんだけど、こうも見事に返されちゃうと立場ないでしょ、オレの。」
背中に熱を感じる。

動けない。物理的な話ではなく…

「だからさ、こうやって恐怖で格の違いを教えてやってるわけなんだが、解るよなあ？それと、だ。さっきの目はどっちののだあ？久しぶりだぜ、あそこまでの殺気はよお。オレだとわかって、出てきたのかあ？まあ、どうだっていいんだけどなあ。」

恐怖。

それしか感じられない。

今、この状況下において、おれの命はこの男に握られている。

背中にある指の存在。その指の先にはおれの心臓がある。

たかが、指を置かれただけ、なのに。そう思わせられるだけの力が確かに存在する。

「んじゃあ、オレはもう帰るわ。」

背中にあった恐怖は消えた。

振り向いたが、男はいなかった。

「せいぜい頑張るんだな！」

男はそう言い残して気配を消した。

体の力が抜ける。

そのまま倒れこむ。

意識ははつきりしている。

恐怖もはつきりとまだ存在している。

クマ相手に感じたのも確かに恐怖。ただ、今感じた、感じている恐怖とは比べられない。

比にならない。

時間だけが過ぎてゆく。

夕日で、憂悲で染まった時間だった。

「おい。悪かったな、待たせた。今回はもうちょい早く帰ってくるはずだったんだが、手間取ってな。悪……なんかあったか？」

ジル兄の表情は一転した。

「ううん。別に何もなかったよ。」

「そうか…勘違いか。」

悟られたのか、そうでないのかはわからない。

「で、どうするか決めたか？」

「…おれは強くなりたい…強くなる…だから、決めたよ。世界に出たい！」

「そうか。…わかった。」

そう言っただけで、おれを抱き寄せた。

「おまえは強くなるよ。」

そのひと言で、おれは…

01..決意(後書き)

読んで下さり、ありがとうございました。

温かい目で見てやってもらえたでしょうかw?

まあ、楽しんでもらうことがあったならば、それは幸いです。
ありがとうございます。

これから頑張って書いていこうと思います。

今後ともよろしく願います。

>長さは、これくらいでいいのでしょうか? 自分的にはもうちょい長い方がいいのかなと思ったりしたんですが、途中でタイトルが浮かんでしまったので、ここまでにした次第であります。

02：旅立ち、事件、仲間（前書き）

どうも、秋藤です。よろしくお願ひします。

02..は長くなってしまいました。すみません。

それでも、楽しんでもらえたらうれしいです。

毎度のことですが、温かい目で読んでやってください。
では、このへんで。

02：旅立ち、事件、仲間

ひと騒動、ひと決心、一段落ついて、迎えた朝。

「おい、そろそろ行くぞ。」

ジル兄の声。なんだろ、遠くから聞こえる。

「もう、いい加減起きろよ。」

はっと目が覚める。

あたりを確認。

テントの中ではない。周りを見渡しても残ってはいない。おれが
出発前の準備に必要なもの以外は。

寝てる間に出されたのか。

「ごめん、ジル兄。おはよう。」

「ああ、おはよう。顔洗って、目覚ませよ。」

そばにあった桶の中の水で顔を洗う。

冷たい。

「うん、目覚めた。」

「じゃあ、出発前に話があるからここに座れ。」

座る。向かい合う。

「では、これを渡しとく。」

鞘さやに入った刀二本を渡された。

「これは？」

「おまえの新しい武器、得物だ。ただ、約束があるからな、ここからよく聞くんぞ。」

頷く。それを確認してからジル兄は話し出す。

「第一に、人を殺すな。」

「第二に、剣を抜く必要がある時だけ、剣を抜け。」

「第三に、逃げる事ができる状況なら、逃げろ。」

「第四に、オレの言うことは聞け。だ。解ったか？」

「うん、わかったよ。守るさ。」

「それと、これはできるだけ守れ。ステイルフォードの名は出すな、だ。」

「うん？まあ、いいよ。おれはヴァンだけでも十分だし。」

「ならいいんだ。それと、これもおまえに預けとく。」

黄色い水晶のような欠片がついているネックレスを渡された。

「ほれ、身に着けとけ。」

「なに、これ？」

「ん？お守りだ、お守り。渡しとくもんはこれくらいかな。じゃあ、行くぞ。」

おれはネックレスを身に着けた。

ジル兄は、ウエストバックをあさってる。

「おっし！じゃあ、最初はどいうところ行くんだ？」

「ん？まあ、人が多いとこかな。さっさとおまえには、魔法に慣れてもらわないと。心配なのは、おまえが魔法に慣れる前に危険な目に合うことだからな。」

「人が多いとこかあ。楽しみだな。……んで、なにやってんの？」

「ああ、悪い。…お、あった。」

そう言って、何かを取り出す。

何かを持ってる手は力が籠り、白く光る。

すると、その何かを地面に投げる。

パキンっ！

音がしたその場所にはボードのようなものがあつた。

楕円型。先は細くなっており、縦約1メートル80センチ、横約80センチ、厚みは2センチといったところ。後部には何かを排出するような、機械的なものがついている。

ジル兄が乗る。

「じゃあ乗れ。出発するから。」

「ええっ！？なんかこう、冒険するぞ！って感じで歩いたりしないの！？」

「んなこと言われてもな、ここから人が多いところ行くのに歩いたら1か月以上はかかるからな。これですっ飛ばした方が速いんだよ。いいから乗れよ。」

『ええ。』

なんか、なんだろう、なんとも言えない感じになった。

「うん、わかったよ。」

なんだか、よくわからないものに立つ。

「ちゃんと掴まっとけ。落ちるなよ。」

その瞬間、フワッと浮いた。

高く。さらに高く。ざっと、2、30メートルか。

「下ばかり見てないで、周り見てみろよ。」

言われるままにあたりを見渡す。

「すごい…」

そこにはどこまでも続く大地。遠くには聳え立つ山々。果てしない海。

圧倒された。

見入ってしまう。

自分の知らない世界。

知っていた世界とは、比にならない。

希望に、夢に満ちた世界だった。

「んじゃ、行くぞ。」

いきなり速度が上がる。

「うわあっ！」

振り落とされないように、手に力が籠る。

もう、あたりを見渡す余裕なんてなかった…

目も瞑ってしまったし…

「おい、もう離せよ。着いたから。」

恐る恐る目を開けると、そこは町だった。町の真ん中。あたりを見渡しても、見渡さなくても、人、人、人。

活気があるところだった。

「だから、いい加減離せって。」

「ああ、ごめん。」

そういつて手を離す。

「んじゃ、まずは宿探すか。おい、離れるなよ。」

「ああ、うん……」

意識は完全にうわの空、もう何を聞かれたのかもわからなかった。色んな人がいる。

ガヤガヤと、声が至る所から。うるさくもあつたが、嫌な感じではない。

なんか、楽しい感じだ。

店も出てる。

実際に見たりはしていないが、”普通”の生活というものをジル兄からは教えてもらっていた。だから恐怖はない、が少し戸惑う。普通に店が並んでる。ずらっと、並んでいる。ここの地区は露店が主なんだろう。

食料を売っている店々。

武器を売っている店々。

動物を売っている店々。

特に目を引いたのが魔法を売っている店々だ。実際に売っているのは”魔導書”だったが、店前に際立きわだって見えるのは魔法だった。すべて大きな透明の瓶の中に入っているのだが、水の球が浮いていて自由自在に形を変えていくものや、止まらない風の渦。咲いては枯れ、また咲いていくというサイクルを繰り返す花。そして、黒い霧の中にある大きな目。

その目と目が合う。

ゾク……

気味が悪くなって目を離す。と、あたりには人がいない。

『あ、れ？……』

「誰かをお探しかい？ 獣人さんよお。」

振り返るとそこにはあいつがいた。あの男。

「久しぶり、ってほど経ってねえけどな。死ぬかあ？」
頭、後頭部に激痛。

「いって！」

振り返るとそこにはジル兄が、他の人たちもいた。

「……あれ？」

「変なのに捕まってんじゃねえよ。行くぞ、速く歩けよな。」

不思議な、恐怖の時間終わり。

あの魔法の店屋には振り向かった。

速足のジル兄についていく。

広場に出た。

そこは他の所より賑わっていて、何かやっているみたいだった。

「さあさあ、お集まりのみなさんっ！これから始まりますのは、簡易コロシウムでえすっ！今回の対決は97回連続勝利を収めているチャンピオン、キャプテン・ジェイサムっ！！対するチャレンジャーはここらでは屈強で有名な肉屋のバーロっ！！さあさあ、みなさん、どうですか！？ただ今、挑戦者に対するオッズは100倍になっておりますっ！！夢見てみませんかあ！！？」

湧き上がる歓声！

「うわあ、びっくりしたあ。あれなんなの？」

「あれか？んゝ、まあ、戦いを見世物にして金稼いでんだ。」

「へえゝ！」

「……おまえは出れないからな。一応言っとくけど。」

「……やっぱダメ？」

「当たり前だ。ほら、行くぞ。」

おれはまだ見てたかったが、しかたなくついていく。

『今度見てみよう。』

—————南地区、宿屋”デロ”—————
デロの中に入る。

「おまえはそこらへんで待ってろよ。」

そこまで大きくはなかったが、いい感じの宿屋だ。
広いロビー。そこにある椅子に座る。

人は何人かいた。バーのカウンター席に座ったり、おれと同じく
ロビーの椅子に座ったりしている。

円形に吹き抜けになっていて、2，3階部分が見える。ここは3
階建て。

階段は吹き抜けに沿うように螺旋状らせんじょうになっている。

「すごいな。」

「ほれ、鍵だ。」

「ああ、うん。部屋はどこ？」

「3階だ。308号室。」

「やった！一番上だ！」

おれはさっさと階段を上がり、部屋に入る。

「おお！」

寝室ひとつに、ふかふかのベッドふたつ。ベランダがついていて、
海が見える。もちろん、トイレなども設けられていて、キッチンも
あった。

「おおお！すごいな！」

ベットに突っ込む。

「ふかふかだ！こんなんで寝たことねえ！」

すかさず、ベランダへ。

「うわあ！近くで見るとすげえな！」

「はしゃぎ過ぎだった。」

「でも、すごいよジル兄。」

「んじゃ、おれはここにいるから、適当にどっか行っていいぞ。」
『ええ…：あなたはここでこのセカイのことを知らないモノをヒト
リにするんですか？…』

「あ、これ持っけ。ん、じゃ、いってらっしゃい。」
手ではらわれた。

もう出ていくしかなさそうだ。

「夜前には帰ってこいよ。危ないから。それと、面倒は起こすなよ。」

「うん、わかった。」『それが、カリにもホゴシャのいうことです
か?…』

渡された財布をもっておれは出ていく。

ボタンっ：

何かを失ったようなような音に聞こえた。

「：んじゃ、どっか行くか。」

何も考えなしに外へ出る。

持ち物。腰に差している二本の剣。財布の中にあるいくらのお
金。あとは、何もない。

今は宿屋デロを出て、広場の所まで戻ってきた。今もまだ人が賑
わってる。

「さあゝゝて、みなさん！ただいま記録を更新したチャンピオンに
挑む勇者はいませんかあゝ！？」

広場は賑わっているものの、新たな挑戦者がいなくて膠着^{こうちやく}してい
る。

『なんだ：終わってたのか：』

おれはしゃべってた司会者らしき人物に会いに行った。

その司会者はピエロのような恰好をしていた。顔まではペイント
していなかったが、下から上まで、帽子まで、色とりどりのシマシ
マだ。

「なあ、おれも出れないかな？」

『ん？なんだこのガキ…』

「なんだい、ボウや？迷子かい？迷子なら他の大人に聞くんだな、
おじさんは忙しいの。」

「はあ？んなこと言ってねえよ。おれも出たいって言ってんの。」
司会者は改めておれを見る。

「だめだめ、刀なんか差してちゃ危ないだろ。」

「ああ、心配ねえよ。この刀なら抜かないからさ。鞘に入っただけで大丈夫だ。」

「ボウや。そうじゃないよお。このゲームにボウやが出れるはずないだろ？ なんだってボウやなんだから。それに、街中でこんな刀差してたら危ないって意味だよお、魔警まけいに通報するよお？」

『おれがガキだから出れないってことかよ…』

「なんだよそれ…じゃあいいや、帰るよ。」

おれはそのまま立ち去った。

今度は露店が出た地区へと向かう。

「なんだか、やっと新しい世界に出てきたってのに、いいことねえなあ。」

独り言。虚しく。響かず。

露店の地区に戻ってきた。

そこでいろんなものを見た。

ほとんどが、知らないもの、本でしか見たことないものばかりだった。

そのためか、時間を忘れ、夢中になっていた。

が、ふとある人物が目に入った——

「隊長。ダメです。こちら辺に奴らはいないみたいですよ。」

「そうか…イヴの方はどうだった？」

「先ほど連絡取りましたがまだだそうです。」

——青髪の少年、いや正確に言うなら藍色か。

あの髪の色は覚えている。確かにピンとくる。

そして、顔。あの顔もピンとくる部分がちらほらと…

その少年に声をかける。走りながら近寄って。

「なあ、おまえ！もしかして、英雄ジュセイン・ベルグの——

——」

そこで切れた。いや、切られた。いやいや、切られた。

まだおれと少年の距離は6、7メートルはあったはずなんだが、

どうしてか目の前に少年が現れた。

そして。

「オレにその名を出すな。」

その言葉を聞いた瞬間。

少年の足が…

ドコオオオオン……………

露店が破壊される音。おれに。

そう、またもやおれは吹っ飛ばされたんだ。

「た、隊長！なにやってんですか！隊長と同じくらいの子供だったじゃないですか！いくらなんでも…」

「静かにしろ、トビ。ただの喧嘩だ。何が悪いことがあるんだ？それに”あの名”をだした。そのことだけでも、おれに喧嘩を売ったも同然なんだ。仕事に戻るぞ。—————それに、あいつは恐らく大丈夫なはずだ。」

「えっ、それはどういう…？」

「オレは人殺しじゃない、だから人を軽く殺したりしない。…あの攻撃は致命傷を与えるものじゃなかった。それにあそこまでは吹っ飛ばないはずだ。…まあ、いい。行くぞ。速く奴らを見つけないければ。」

……………

トビと藍い少年は行った。

「あたたたたた…」

露店の残骸から体を起こす。体を確認。

「うん。無事みたいだな。」

「おい、きみ大丈夫か？」

壊された露店の主人。果物屋のおじさん。

「ああ、ごめんねおじさん、露店壊しちゃって。おれは大丈夫だよ。」

「おいおい、ホントにか？あんなに飛ばされたのに大丈夫なんて、10メートルは吹っ飛ばされたぞ。」

「ああ、きつと運がよかったんだね。：お店大丈夫かな？」

「ああ、こことは別にこの町に本店があるんでな、問題ないさ。」

「そっか、よかったよ。直すの手伝うよ。」

そこから、おれは露店を直すのを手伝った。

時間は経過し、夕方に。露店は見事とは言えないものの、8割方は直せてた。

「ふう、助かったよ。ありがとう。何かお礼をしなくちゃね。」

「ああ、いいよそんなん。」『ホントはおれが悪いんだし：』

「いやいや、ここまでしてくれたんだから、当然だよ。」

『：困ったな……』

「じゃあ、おれを吹っ飛ばした、藍色の髪の少年のこと知ってるかな？」

「ああ、あの子ね。いや、あの子なんて失礼だね。デュオンくんだよ。魔法戦斗団体、まほうせんとうだんたい3番部隊隊長、デュオン・ベルグ。それが、彼だ。」

「魔法戦斗団体？」

「そう、私営団体でね、戦闘を職業とする人たちさ。大抵は賞金首とかを捕まえて、魔警、政府からお金をもらってる団体かな。」

『だから、あんなに強かったのか。それに、確かめたかったこともわかった。』

「ん、ありがとね。じゃあね。」

「こんなのでよかったのかい？ おかしな子だね。」

「おれは、おかしな子なんかじゃないぜ、おれはヴァンだ。ヴァン・ステイ：ンだ。」

「そうかい、これは失礼した。じゃあねヴァンくん。」

そうして、おれは露店を後にした。

夕日で染まった町。

今更ながら、設置してあった、大きな町の地図で確認。

この町の名前は”アラマンダ”。円形に広がっている町で、広場を中心に4区間、4地区に分けられている。北地区は店、民家中心。

東地区はここ、露店中心。南地区は娯楽、宿屋中心。西地区は：政
府施設中心か。ざっと紹介。

「東と南は見たからな、まだ時間もあるし北でも見に行ってみるか
な。ざっと見るだけなら時間もかからないだろうしな。」

そうして北へ向かった。広場には行きたくなかったのでその道は
通らなかった。

だが、それがいけなかった：

『ああ、やべえ…』

完全に迷った。さっきは否定できたが、今はできそうにない：迷
子だ。

日も落ちて、いくら経った頃。

また地図を見つけた。さっきの場所のではないが。

「おおっ！ 帰る手がかりがあった！」

そこに駆け寄ろうとしたとき、遠くに女の子がいた。

『こんなところでなにやってんだ？』

まあ、自分のことは置いて、だ。

とりあえず地図は後でも確認できるので、女の子の所へ向かうこ
とにした。

女の子はあたりを見渡しているようだった。誰かを探しているよ
う。

近づいた瞬間、女の子と目があった。黒い瞳、黒い髪。背はおれ
よりも少し低い。服はなんかの民族衣装か？ 淡い青色と白色の衣服。
力強い目が、そこにはあった。

だけど、おれはもうひとつの影を見た。女の子の後ろに立つ男の
影が。

男は手を上げ、何かを振り下ろす。

女の子はそれに気づき、おれの方へと回避。

「ここはあぶないから逃げて！」

おれの方を向き、男を背後にした状態でそういった。

その瞬間、男からの攻撃がきた。

おれは女の子を躲し、男の懷へと入り込む。そして……
ドスっ！

おれの刀が男の懷を突く。と言っても鞘に入っている刀だが。
男は倒れこみ、動かなくなる。氣を失ったようだ。

「ああ、悪い逃げなくて。」

キョトンとしている女の子。

「あれ……？」

「こいつ、なんなんだ？ なんであんたを襲ってきたんだ？」

「えっ！？ ……それは、私たちがこの人たちを捕まえようとしてるから、だよ。」

「え？ なんでこいつを捕まえよう？」

ふたりの頭にはクエスチョンマークしか出ていない。

「え、えっと……それは……とりあえず、ありがとね。助けてくれて。」

「ああ、いや、もともと助けようとしてたのはあんたなんだろう？ それをおれがややこしくしたっていうか……」

沈黙。

少しの間をおいて、女の子がきり出す。

「一応自己紹介ね、わたしはイヴ。魔法戦闘団体、3番部隊所属、イヴ・ランドロークです。よろしくね。」

「おおっ！ あんたが魔法戦闘の……！」

「あんた、じゃなくてイヴだよ。うん、そうだよ。だからこの男、凶悪犯罪組織ベルクスのひとり、バムを捕まえようとしてたんだよ。で、見事ヴァンくんが捕まえてくれたってわけ。」

「いや、おれは何も……あんた……じゃなくてイヴ。デュオンってやつ知ってんだろ？ 連れてってくれないかな？ おれはあいつに会いたいんだ。」

「えっ！？ 隊長に？ でも、まだ仕事だから、難しいかな。」 一般人を巻き込むことなかれ”が私たちの教えっていうか……だからね、今は難しいかな。」

「仕事中って、こいつ捕まえたじゃん。これで終わりだろ？」

「いや、まだなの。あと1人、ボスのベロリアって奴がまだいるはずなんだよ。隊長たちが捕まえてなければね。他のベルクスメンバーは他の部隊が取り締まってくれたおかげでね、この町以外のところにいるメンバーは捕まえたんだよ。で、ここにいたメンバーのあと6人を捕まえる役目が私たち3番部隊で、今5人目を捕まえたから、あと1人ってわけなんだ。」

「ふうん、なんとなくはわかった。」

『なんとなく、なんだ…』

「でも、そんなことおれに言っただけでよかったのか？一般人なんだろう？」

「あ…ああ、い、命の恩人ってことで大丈夫なんじゃないかな。…」

「ホントにそんなんでいいのかよ。」

「あまり深くは聞かないで…」『ダメだから…』

「んじやさ、おれもイヴに庇ってもらったじゃん？だからさ、そのお礼にその、捕まえんの手伝うよ。」

「だから、ダメなんだって…」『ホントにほんとになくだったんだ…』

「やっぱ、ダメか。楽しそうだったのにな。」

何気なくあたりを見渡す。

暗い。

人もいない。

光源は夜を照らす街灯だけ…そう、夜なんだ。

『あ、やべ…』

「あ、あのさ…ひとついいかな…？」

「だから、仕事に関することはダメだって。」

「い、いや、そうじゃなくてさ。その…」

『非常に言い難い…』

「宿まで連れてってくれる？…」

「…へっ!？」

以上が夜の襲撃事件の会話。

そこからはイヴがバムを連れて、おれの宿へと案内してくれた。

詳しく話すと、連れてった方法はイヴの魔法だ。イヴは水の魔法を使える。そこで、バムを大きな水の塊の中に入れ（もちろん顔を出してだ）、空中に浮遊させながら連れてきたわけだ。そして、帰り道の会話は、まあ、適当な話。

宿屋デロに着いた。

「ありがとな。」

「ううん。気にしないで。たしか308号室だよね？」

「ああ、そうだよ。」

「じゃあ、ヴァンくんバイバイ。また会えるといいね。」

「ん、じゃあなイヴ。」

そして、宿の前で別れた。

時刻は、わからない。ただ、夜ってことは確かだ：

気が重い：

扉を開け、階段を上っていく。308号室へと進む。

ギィィィィィ：

この扉の音にはトラウマが生まれそうだ。

「…おい、ヴァン君？さて問題です。今の時間帯はいつたいなんと呼ぶんでしょう？1、朝。2、昼。3、夜。さて何番！？」

『こ、答えないと：ならないよ：な』

「さ、3番…」

「ヴァン君！正解だよ、正解、大正解だよ！」

正解コールと共に頭に鉄拳が：

「…………で、なんで遅れたんだ？こんな夜まで。」

「あ、そ、そうなんだよ。それが…」

いままで起きた、起こした出来事をジル兄に話す。

そして、すべて話した後。

「おい、今度帰りが夜になったら外出禁止な。」

「ええっ！？そこは、『危ない目にあったんだな、大丈夫だったか？』とかの心配の言葉は？」

「そんなもんじゃない。その程度の事は危険だとかいう部類には入らな

いからな。犯罪組織なんてベルクスだけじゃない。それこそ星の数ほどある。この町にいくつがあるのだって、なにも不自然な状態じゃないんだ。」

「でも、危ないからって言ってたじゃん？だから夜前に帰って来いって、言ってたんじゃないの？」

「確かに言ったけどな、それは意味が違うんだ。この町にある犯罪組織やら、そういう類の事はここに降りる前に全部調べてあったんだ。でもだ、もしかしたらオレが心配している強悪犯罪組織の奴らがここに来ないとも考えられない。だから、おまえには夜の歩道を禁止したんだ。」

「で、でもイヴが、魔法戦闘団体の人がベルクスも凶悪犯罪組織だって…」

「まあ、一般人視点で言うならな、違うじゃないよ。あいつらは人殺しだからな。詳しくは知らんが。ただ、おまえが黙って殺されるような奴らじゃない。だから、ここにしたんだよ。まあ、細かく言えば他にも理由は多々あるが、主な理由はそれだ。おまえが死なない場所ってことだな。」

『なんだよそれ…』

「それにだ、外の世界に来たとはいえだな、修業はまだまだ続いてんだ。平凡で、穏やかな生活だけじゃ修業にならないだろ？」

最後の方はニヤニヤと笑みを浮かべてた。

『人の気も知らないで…』

「：まあ、でも実際ベルクスの奴を倒したんだろ？刀も抜かずに。」
「あれは、倒したっていうか、一瞬だったからな：一瞬で倒れちゃったんだよ。」

『ヴァンにしてみれば戦いにすらなっていないか…』

「まあ、生意気なこと言うようになったなあ。それも含めた罰として、ここにいる間ずっと身の回りの事をやってもらいます！言うなれば雑用係！」

「ええ！…」

その後、何度も反論や許し、妥協案など出してみたが全て却下された。

次の日の朝。

おれは昨日から就いた雑用係の仕事を熟し、朝食を食^こべた。

ジル兄はまだ起きていない。

時計を見ると午前6時45分。前の生活には、ほぼ時計はジル兄が持っていたのでわからないが、体内時計によれば、もうジル兄は起きていてもよさそうな時間帯なんだけれど。

おれはジル兄の分の朝食を冷蔵庫に入れておき（初めて開けた時、ビビったおれを見て爆笑したジル兄のあの顔は記憶から消したい）、持ち物をもって外へ出た。

今度は広場の道を通って、北地区へ。昨日イヴと帰った道と同じ道だ。

宿まで一緒だったのは、イヴが『私たちと接触した一般人が、私たちのいない間に攻撃に合わないため』とかなんとか、だった。到着。

昨日見かけた地図がある場所に着いた。

『やっぱり、ここだったか…』

地図を確認し、北地区の探索に出かけた。

といっても、民家中心なのでたいして見るものはなく、朝なので店は開いてなかった。

『まあ、こんなもんか。あんまし期待はしてなかったからな。』

そのまま北地区を離れ、広場に戻り、西地区へ。

西地区。

前にそこは政府施設が中心と言ったけれど、表は、大部分は政府施設中心と言うだけだ。裏は、その他の小さな部分は治安が悪いらしい。言うなれば、そこが犯罪組織が集まる所になっているということだ。

『政府施設のすぐそばに犯罪組織の集会所ですか…』

この西地区を後回しにしたのはこのためだ。

だが、行く気がないわけではない。むしろ、政府施設というのには興味があつたし、少しは裏の部分にも興味がある。

到着。

そこには、大きな図書館があつた。開いてはないが。2階建ての図書館で、幅がかなりの長さだ。そこに設置してあつた大きな時計を確認すると、今は8時前だ。

ちらほらと人が見えるようになったのはこのためか。

そこであのデュオンといった男。トビと言われた男とあつた、というか話しかけられた。

「おお、ヴァン君！ヴァン君だよな？この前は悪かったな。デュオンのやつが…あ、いや隊長が蹴り飛ばしちまって。大丈夫だったか？」

「ああ、うん。大丈夫だったよ。平気だから心配しないで。」『あ

あ、”普通”の反応だ。誰かとは違って…』

「んで、こんなところで何やってんだ？ひとりみたいだし…」

「散歩だよ。1人でね。トビさんは何やってんの？」

「んあ？俺か？俺は…何で俺の名前知ってんだ？」

「それは、ただ、聞いてたからだよ。イヴって子からね。」『まさ

か、あの時間いていたとは言えないよな。』

「ああ、イヴからか。そうだよ、ヴァン君が捕まえてくれたんだってな。まだ子供だつてのにすごいんだな。でも、今度からは危ない真似はしちゃダメだぞ。」

「でも、あいつらもおれと同じくらいだろ？」

「それは隊長とイヴは強いからな。というより、魔法戦闘団体の一員だからだよ。」

「じゃあ、おれも入りたいな。その団体にさ。」

「まあ、強くなつてからな。その話は置いて、こちら辺には今はいい方がいいぞ。ヴァン君も知っているとは思うが、ベルクスのボスがここにいる情報があつたからな。」

『ああ、ベロリアって奴か…』

「うん、わかったよ。じゃあ、またね。」

そこでふたりは別れた。

おれは広場の方へと…行くわけはないんだよな。

『団体に入るにはあいつを倒せばいいかな。』

おれは短絡的に考え、おれが次に向かっていた裏の西地区へと向かう。

そこは荒^{すさ}んでいた。

荒れ果て、人影も無く、空気も淀んだ場所だった。

自分に緊張が走るのを感じる。

ピリピリと。

進んで、進んで、進む。深みへと。

っ!?

突然後ろに気配を感じた。

「誰だっ!？」

振り返り、叫ぶ。

当然のように誰もいない、いや見当たらない。

仕方なく進む。

荒れた、廃墟に着いた。ここにベロリアがいると確信があったわけではないが、いるならここかなと思ったただけだ。根拠はない。

『さて、行くか。』

その時だった。

廃墟から炎が飛んできた。

「うわっ!」

思わず、声を上げる。

回避。突然のことで見事とは言えないが、焼かれはしない。

「ガキのくせに避けやがって。今ので焼かれとけばよかったのによ!」

罵声とともに現れたのは男だった。

見事に悪役面した男。頭はスキンヘッドで、服はいわゆる族っばい服。あらゆるところにアクセサリー類をつけている。

「よくもまあ、俺の組織を潰してくれちゃって…死ねよ。」

ベロリアは両手を突出し構え、言い放つ。

「^{ゼド}火矢！」

構えた手から、火柱がおれに向かって飛んでくる。

「危なっ！！」

また回避する。

「避けてんじゃねえ！」

『んなこと言われても…』

「殺^{しと}留めてやる！」

ベロリアがおれに向かって飛んできた。その言葉の通りに、飛んできたんだ。

ベロリアの手にはナイフがあった。

『やばっ！』

キィイイン！

ベロリアのナイフを刀で受ける。

「なっ！？」

相手がひきつる。

おれはベロリアを弾き返し、もう片方の鞘に入った刀で懷を突く。

「ぐはっ！？」

吹き飛ばした。いや、吹き飛んだ。おれと同じように、ダメージを軽減するためだ（まあ、おれの場合は後ろに露店があったんだが）。

だが、ベロリアはそれ以上だった。何せ飛んでいるのだから。かなりの力を軽減できたはずだ。

敵を確認。

ベロリアは足に何か着けていた。そこから煙が出ている。恐らくそれが飛ぶ動力だろう。

『魔法、か。ん？確か魔法の性質は1つじゃ…』

思考に耽^{ふけ}つているところに一発やられた。

バキッ！

横腹に蹴りをくらった。

吹っ飛ぶ。これはダメージ軽減とかじゃない。モロにくらった。

『ぐっ…』

「雑魚が調子こくんじゃねえよ！」

「いつてててて…どっちが雑魚だよ。」

折れてはない、だろう。わからない。口からは血が出てるが、たいした量じゃない。

おれは口を拭^{ぬぐ}い、敵を確認。

嘲笑^{あざわら}ってやがる。

こっちは魔法とは程遠い戦闘方法。対して敵は魔法だらけの戦闘方法…

『分が悪いのはどう見てもこっちな…』

ベロリアが直進してくる。ナイフを構えたままで。

おれはギリギリで躲す。

が、ベロリアは空中で回転。遠心力も加わった蹴りをくらった。

「ぐはっ！！」

今度は背中にくらい、吹っ飛んだ。

「ガキはガキか。こんな奴らに壊滅まで追い込まれたってのは納得できねえな。」

「おいおい、魔法も使わないやつが魔法戦闘団体なわけないだろ。」
聞き覚えのある声だった。

「おい、ヴァン…だったな。イヴを助けてくれたっていう。その件はありがとな。…で、そんな実力をもっているお前がなんでこんな奴に無様にやられてんだ？」

「なんだあ？糞ガキ！？誰だテメエ？」

「あんた、デュオンだよな？隊長の…ありがとな。助けてくれて。」

「お前がイヴを助けたからだ。その恩があるからな。それがなかったら助けてない。特にあいつの名を出したした奴はな。」

「あはは、どうも…」『イヴ、ありがとう。』

「シカとこいてんじゃねえ!」

デュオンに火柱が襲う。

が、それを軽く避ける。

「こんなレベルで1つの組織の頭か。うちももう少し骨のある仕事をやればいいのに：しゃあないか。」

「なんだ、テメエ!？」

「オレは魔法戦斗団体、3番部隊隊長デュオン・ベルグだ。」

「て、テメエが隊長? ガキが隊長とは傑作だ!」

デュオンがため息。

「いいから来い。こんな仕事に時間を取られてるほど暇じゃないんだ。」

「ああ? じゃあ、さっさと終わらせてやるよ!」

ベロリアが迫ってくる! それも速い。おれの時の比ではない。

しかし、なぜだ:

デュオンとの距離があと数メートルになった瞬間、吹っ飛んだ。

「:は?」

理解不能。

疑問とともに吹っ飛ばされるベロリア。

今度はデュオンが動く。

クナイを空に、四方に投げる。かなりの数だ。

が、空中でその何十本のクナイは方向を変え、全てベロリアに襲い掛かる。

「うわっ!？」

理解不能に追い打ち。

ザザザザザッ!

空中で飛ばされているベロリアに傷つけることなく服だけを刺していく。

ベロリアは地面に叩き付けられ、そのまま動けずにいる。

「:おい、ヴァン。なんで魔法を使わなかった? いくらお前が強い

としても、さっきのはねえだろ。」

デュオンはこちらを振り向かずに、淡々と聞く。

「え？ ああ、……魔法を使わなかったんじゃない、おれは魔法が使えねえんだ。」

「……魔法が使えない？ 何言ってるんだよ。」

振り向き、こっちを向く。その表情は当然感じの良いものではなかった。

「何言ってるんだよ。自分が使う魔法を隠す必要でもあんのかよ！」
怒鳴る。その表情はひどく怒りに満ちていた。

「あ、いや、ホントなんだって……」『な、なんでそんなことで怒んだ？……』

「あのな、恩があるとはいえ、」

「そいつの言ってることは本当なんだ。」

ジル兄の声。路地からぬつと出てきた。

「ジル兄。なんで……ここに？」

「修業の成果を見物にな。————で、デュオンくんだよね？ 3番部隊隊長の。オレはジキル・スタイルフォード、よろしくな。」

「よ、よろしく。」『こいつがスタイルフォードの？……んなバカな。』

「話聞かせてもらおうと、ヴァンとは初対面じゃないみたいだな。で、さっきの話の続きでな、ヴァンは本当に魔法が使えないんだ。」

「この世の中のどこに魔法を使わない奴がいるんだよ。……まあ、いいさ。オレは本部に帰る。」

「なあ、戻る前にさ、ひと言いいか？」

「……なんだよ。」

「そのヴァンと魔法なしで戦ってみないか？」

『何言ってるんだよ……』

「オレにはそんな暇ない。そいつの戦いを見た限り、ただの雑魚だ。あんな小物にやられてるようじゃ、話にならない。」

「そこを何とか……っな！」

突然ジル兄は消え。デュオンの背後に現れた。

『な、なんだコイツ……オレが見切れなかった……』

「頼むよ。」

何が起こってるのか、おれには解らなかった。デュオンもおれと同じ顔をしていた。

ピンツと張り詰めた空気。

「わかった。」『帰る前にコイツの事を調べるのも悪くないか。』

「おお、よかった。じゃあヴァン！準備しろ。剣は……使っても大丈夫か？見たところ丸腰だけ……」

「ああ、心配ない。」

デュオンは背中に手をやり、刀を抜いた。

「ああ、霊刀使えるのね。じゃあ、心配ないか。」『こりゃあ、予想以上だ。ちと、まずい……か』

デュオンがこちらを見る。冷たい目だ。

「なあ、初める前にひとつだけ。これが終わったら、あんたにいくつか質問がある。それを全て答えてくれ。」

「プライベートなことはなしだぜ。」

会話が途切れ、ジル兄の背後から消える。

おれの目の前に……

ブンツ！

デュオンの大刀がおれの頭目掛けて斬り出される。

おれは身を屈め、ギリギリで躲し、後方へ距離を取る。

「おいおい、移動も魔法使うなよ……」

『移動も……本当に魔法なしか。』

「わかった。」

おれは……なぜ、躲せたのだろう————

またデュオンがおれに向かって斬り出す。

今度は消えてなんてない。しっかりと見える。

見切り、躲す。全てを……

綺麗な太刀筋だ。大刀から生み出されるものとは思えない。

荒々しくなく、しかしお淑やかでもない。――――意志のある、心の強い太刀筋：

それに比べるとデュオンの顔は・・・

何故だろう：刀から感じる意志とは違う。

『な、なんだコイツ：なんで、躲せる：？』

一瞬の隙を見つけた、いや感じた。

「候天！」

壱の型。両刀で相手を突き刺す型。

ギィィィン！

「チッ・・・」

候天を防がれた。両刀ともデュオンの大刀でだ。

だがおれは押し切り、吹っ飛ばす。

追尾。

「なっ！？」

吹っ飛ばされたデュオンが体勢を整える。

その刹那。

構えの空いた右脇へ

追撃。

参の型。両刀を平行に構え、右に引く。両目にはしっかりと獲物の姿を映す。

――――その型。隼の如き迅速に獲物を喰らう。然れどその姿、霞の如く捕らわれず。壬鎖風流剣技、隼霞――――

「隼霞！」

深く、深く、身を沈め。深い、深い、斬痕を：

時間が、空気が、思考が止まる。

ふたりの刀は止まっている。

ひとつは懷で。

ひとつは首もとで。

両者の刀は、両者の命を獲ることができる所で止まっている。

沈黙。
かんたん
間断。
とこやみ
常闇。

「…なあ、あんた。…引き分けていう終わり方はないのか?…」
「あ、ああ。ふたりともそのまま刀を引いてくれ。」「まさか、ここまでやるとはな。…霊刀相手だから瞬殺されるかと思ったが…」
デュオンは大刀を背中に戻す。鞘のようなものはなかったはずだが…

それを見て、おれも刀を鞘へ。

「ヴァンの相手をしてくれてありがとな、デュオン。—————じやあ、質問タイムですか。」

「コイツはなんなんだ?」

『ん? てつきり名のことを聞かれると思ったんだが… ヴァンに興味を持ったのかな…』

「おいおい、コイツってのはひどいな。弟なんだ、ヴァンって呼んでくれよ。本名はヴァン・ステイルフォード。年齢11才。大事な弟なんだぜ。」

『ステイルフォード…』

「…ステイルフォード。この国、ガイラルディア王国の王族、ステイルフォード家。…その名を王族以外の人間が使用した場合、死刑に処する…これはこの国の法律、第一条の一文だ。知らないわけではないよな。」

「ああ、もちろん知ってるぜ。ガキの頃に叩き込まれたからな。…次の質問は—————」

ジル兄は左肩をだす。

その肩には、狼と剣、そしてステイルフォードの名が刻まれている。た。

「————証拠を見せろ、だろ?」

「っな!」

僅かな沈黙。

しかし、僅かな時間であっても、デュオンの顔は著しく変わっていた。

「おい、ひとつ言っておくが・・・さっきと同じように接してくれよな。」

「あ、いや、しかし・・・」

「：だから、この名は嫌なんだよな：」

「わ、わかりまし、いや、わかったジキルさん。」

「さんって、さっきまでつけてたかよ。」

「う、そ、それは、：年上に対する礼儀として受け取って頂けませんか：」

『年上に対する礼儀ねえ：』

ジル兄はにやけてる。あの顔にはいい思い出はない：

「まあ、さん付けはいいや、それで。ただ、敬語はいただけないな、さっきと同じで頼むよ。」

「わ、わかった、ジキルさん。」

「ふん、まあ、合格だ。で、質問タイムに戻ろうか。」

「：なんでヴァンは魔法を使えない？」

「ああ、それね。それは”魔法戦斗団体の”デュオンには話せないところなんだ。」

『……』

「じゃあ、なんでこんなところにいる？」

「それなら簡単。ヴァンを育てるためだよ。てっとり早く魔法に慣れさせたくてね。だけど今回の事件のおかげでかなり経験を得られたからね。だから、あと数日でこの町から離れるかな。」

「ええ！？なんで？この町きたばかりじゃん！」

「いや、あんな戦闘見せられたらな。こんな”生温い”環境には用はないからな。」

「なんでそんなにヴァンを育てるんだ？」

「ああ、それは：来る日のために、だ。：その質問はそれ以上なしな。」

『来る日…』

そこへ3番部隊のメンバーがやってきた。

「こんなところにいたんですか、隊長！…それになんでヴァンくんも！？」

「ああ、イヴ、トビ、ノスリ。任務は完了した。トビ、ノスリ、そこにいるベロリアをここの魔警支部に連れて行ってくれ。」

「了解しました。」

ふたりは答える。

トビさんの顔は知っていたが、ノスリと呼ばれた人は初めて見た。トビさん同様、がたいの良い体格。年も近そうで3，40歳か。

「質問はこれまでみたいだな。ヴァンいったん宿に帰るぞ。」

「ああ、うん。」

「ジキルさん。後で宿に寄ってもいいかな？」

「ん？別にかまわないよ。あと数日はここにいるから。」

『す、数日って…おれの生活はなんだ？これが普通の生活か？』

「じゃあ、事がすんだら行くよ。」

「気楽に来いよな。んじゃ、行くぞ。」

おれはそのままジル兄についていく。

「じゃあ、また後でねヴァンくん。」

「えっ？うん、また。」

そのまま裏西地区をあとにした。

宿屋デロの308号室。

ふたりともベットで横たわってる。

「さっきの子…」

「えっ？」

「あの子がイヴって子か？」

「あ、うん。そうだよ。水の魔法を使うんだ。」

「なるほどな、あの年で戦闘を職とできるやつはやっぱり何か持ってたんだ…」

「…どういうこと？」

「まあ、オレがペラペラと話していいことかわかんないからな、今は黙っとく。」

「そっか。」

「…あっさりだな。聞きたくないのか？」

「…聞きたいけどさ。誰にでも過去ってのがあからね、聞かれたくない事かもしれないから。」

「生意気言うようになったな…まあ、その考えでいいと思うよ。」
それで、会話は終わり。

おれはベロリア、デュオンとの戦いで疲れていて、寝てしまった。

夜。

なんだ、体が揺れてる？

薄らと、部屋の光が目に入る。

だが、急に暗く。

「おはよ、ヴァンくん！」

「う、うわっ！」

突然の出来事でだじろぐ。

「あ、あれ、驚かしちゃったかな。」

「おいおい、驚かせるつもりでやったんだろ？」

あれ？なぜだデュオンの声がする。

「あはは、まあそうなんだけどね」

まわりを見わたすと、3番部隊のメンバーがいた。

デュオン、イヴ、トビさんにノスリさん。

「ああ、ヴァン。起きたか。」

キツチンの方からジル兄が出てきた。

「あのな、あと3日でこの町を離れることになったから。」

「っえ？」

「だから、この町を出て行くんだよ。そこのみんなとな。」

「…へえ…っえ？」

頭が回らない、なんだろう、唐突過ぎてわけがわからない。
デュオンが近寄ってきた。

「これからよろしくな、ヴァン。」

おれは差し出された手を握る。

「ああ、よろしく。デュオン。」――――

02..旅立ち、事件、仲間（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございました。

そして、お疲れ様でした。

今回は3つのキーワードが重なってしまったんでね、長くならざるをえなかった、というわけなんです。

次の03..までの期間はここまで長くしないようにとは思っています。できれば今後とも御付き合いよろしくお願いしたいです。

02-03：ひととき（前書き）

どうも、こんにちは。秋藤です。

休憩巻とでもいうのでしょうか、そんなニュアンスな話です。

では、このへんで。よろしくお願いします。

02-03:ひととき

”アラマンダ”発、”トリトニア”行き、急行列車”アーロン”。

おれはその列車の中、向かい合わせの席が並んでいる車両の中にいる。席は結構大きく、3人分座れる座席が向かい合わせにふたつ、つまりは6人分のグループ席だ。

おれ————ヴァン・ステイルフォード。年齢11才。身長152センチ。髪は黒、そして前髪に青と銀の毛が交じっている。目は黒色。衣服は黒をベースとしたもので、腕、胸、背中、足の裾に模様が入っている。その上に羽織っているのは青色のマント。これにも模様、マークが描いてある。

おれたちは6車両目の一番端の所に座っている。おれは進行方向を正面にとった、窓側の席。その隣にはデュオンが座っている。そしてその隣、通路側の席にはジル兄が座っている。向かいの進行方向とは逆を正面にとった窓側の席にはイヴがいる。その隣にはトビさん、また隣にはノスリさんがいる。

窓から見える景色は明るく、清々しい風景だ。窓から入る風も気持ちのいいものだ。

今日は犯罪組織ベルクスの件があった3日後だ。

あの唐突に切り出されたあと、おれたちみんなは一緒に過ごしていた。3番部隊のメンバーはおれとジル兄の部屋を挟むようにふたつの部屋を取り、そこで寝泊まりしていた。女部屋と男部屋だ。

みんなで色々なことをした。魔法を見て回ったり、本を買ったり、食べ歩きをしたりした。簡易コロシウムに参加出来なかったのは残念だった。戦闘を職としていた3番部隊のメンバーは断られてしまい、ジル兄は参加する気がなかったからだ。それに、政府施設、特に図書館にも訪れた。外から見た感じも大きかったが、中から見てもそれは変わらず、それ以上の広さに感じた。置いてある本は様々で、今まで読んだことのない本ばかりだった。それに、興味を持

っていた魔導書も置かれていた。

そんな生活を2日送り、3日目に北地区から少し歩いたところにある駅、アラマンダ駅からこのアーロン列車に乗ったわけだ。

「：なあデュオン。」

「ん？なんだ、ヴァン。」

デュオン————デュオン・ベルグ。魔法戦闘団体、3番部隊隊長。年は13才。身長は162センチ。体型は標準だが、体は仕事で鍛えられている。髪は藍色。目の色はよく見たら茶系の目だった。藍色のシャツに黒のコートを羽織り、襟を立てている。所々に藍色の線が入っていて、前は閉じず、胸元の1か所だけボタンで留めてある。下は黒のスラックス。最後に黒の革の手袋を両手にし、ガッチリとカタメテある。

「あのさ、魔法は色々と見たけど、魔法の使い方ってのがわかんないんだよね。教えてくれないかな？」

「今更かよ。でも、オレの魔法で教えるよりはイヴの魔法の方がわかりやすいな。」

「んじゃ、私の出番ね。」

イヴ————イヴ・ランドローク。魔法戦闘団体、3番部隊所属。年は12才だった。身長は150センチ。体型は細見。体重は聞けない。髪、目の色は共に黒色。澄んだ黒色だ。髪は長いが纏めてはいない。ふわっとしたボリュームのある髪型だ。服は民族衣装のようだ。全体的に白いドレスだが、黒系のエプロンがついていて、膨らんだ淡い青色のスカートが特徴的。履いているのは黒い革のロングブーツ。腰の後ろには大き目のスカートと同色のリボンがついている。

「ヴァンくんはもう私の魔法のことは知ってるよね？」

「ああ、知ってるよ。水の魔法を使うんだろ？」

「そう。渦水！」
アキュリア

イヴの出した手の上に小さな球体状の水が出てくる。その水は色

々な形に姿に変わる。

その水をおれはつついたりする。水の中に入れた指は確かに濡れてる。

「どうやって出してるんだ？」

「それは魔法陣からなんだけど…」

その質問に困ったようで、ジル兄に訊く。

「魔法についての知識はあるのかな？」

「一応昔に教えたんだけどな…ヴァン、覚えてるかな？」

ジル兄————ジキル・ステイルフォード。年齢26歳。身長183センチ。体型は細見だがそれは引き締まっているわけで、頼りない感じではない。髪、目、共に漆黒。お揃いの模様がついた深紅の衣服を着ている。その上に、またお揃いの銀白のマントを羽織っている。

「いやあ…少ししか…」

「じゃあ、できるだけ簡単にまとめて話すね。」

「それでお願いします。」

「魔法は魔法陣から生まれるものなの。生まれるといっても、何等かのエネルギーを使って生み出されるのね。何等かのエネルギーつてのは源魔げんまと言われていて、一般的に使われるのは魔気まきね。魔気まきっていうのは生命力、心力しんりょく等が合わさって生まれたエネルギーで、体の内部に秘められているの。でね、その魔気が強い人は体の表面に現れたりするんだけど、その場合は気を付けてね。たぶん、戦闘経験者だから。それと魔気まきには一つ特徴があって人が本来持つてる性質、魔法との相性、魔性ませいっていうんだけど、その色が反映されるの。で、反映された色が、濃いほどより強い。…一気に話しちゃったけどわかったかな？」

「ええと、大丈夫…だと思う。とりあえず、魔法は源魔つまりは魔気から生まれるもので、魔気が体から出て、色が濃ければ濃いほどバイ奴ばいってことだよな？」

「うん、そうだね。じゃあ、そこまではOKね。次は魔法が生まれ

る過程なんだけど、ノスリさんの腕を見て。」

ノスリさん————ノスリ・ギラー。魔法戦闘団体、3番部隊所属。年齢43歳。身長175センチ。体はガチガチの筋肉質。だが、顔はいつも優しい顔をしている。怖い印象を与えないためだとか。髪型は短髪で黒色。服装は至ってシンプル。白のTシャツに、青い袖なしファー付きベスト、下は七分のジーンズだ。履いているのは靴ではなくサンダル。

「ああ、俺か？」

ノスリさんは右肩を出す。そこには直径10センチ程度の魔法陣があった。円の中心に何かの絵、マークのようなものがあり、その周りに文字や線ががずらっと並んでいる。

「これが魔法陣ね。ノスリさんの魔気を源魔としてこの魔法陣に流れるの。ノスリさん、ちょっとやってくれるかな？」

「まあ、いいが……土殻^{ドエル}。」

すると魔法陣が茶色く光り、ノスリさんの右手の周りに土のようなものが出てきた。そしてそれは右手に巻きつき、固まった。

「おお！……土の魔法？」

「ああ、土質の魔法だ。触ってみるか？」

ノスリさんはその手を見せてくれる。

触ってみると、見た感じ同様硬い。だが、指などはスムーズに動かせている。

「トビ、ナイフ。」

トビさん————トビ・グロック。魔法戦闘団体、3番部隊所属。年齢43歳、ノスリさんと同じ年。身長173センチ。体はノスリさん同様筋肉質だが、ノスリさんよりは細見ではある。筋肉質な体になったのはふたりで競い合っていた結果だという。髪はオールバックで後ろを結っている。トップスは腹部、胸部を守るような鎖帷子^{くさりかたびら}を着ていて、その上に藍色の袖なしの浴衣のようなものを着ている。腰には帯とナイフを入れるホルスター。ボトムスは裾が広がったズボンで、足袋というものを履いている。

「また壊す気か？まあ、今回はいいけど、もう勘弁してくれよな。」
トビさんは腰からナイフを取り出し、渋々ノスリさんに渡す。

ノスリさんはそのナイフで思い切り、自分の硬化した手を刺した！
ガキンッ！

その音と共にナイフは折れた。

「スゴイ！！鉄のナイフを…」

「あゝあ、もったいな…」

ノスリさんはこれ見よがしに腕とナイフを見せる。

傷一つついてない腕と刃が折れた、使い物にならないナイフを。

「どうよ？これが俺の魔法さ。」

「スゲェよ！」

「はいはい、パフォーマンスはそこまでね。でね、ヴァンくん。今見てもらったように、魔法は魔法陣を通して生み出されるの。」

「よくわかったよ。あの光ってたのが、通過した証ってわけだろ？

…でもさ、イヴの魔法陣はどこにあるんだ？」

「えっ！？…わ、私のは…」

そこにジル兄が割って入る。

「あのな、特に戦闘を職としている奴に言えるんだけどな、たいていは魔法陣が傷ついたり、読み解かれたりしないように人の目には付かない所に書かれてるんだ。だから、それを人に言うのには抵抗があるんだよ。」

「そうだったのか。…ごめん、イヴ。」

「えっと、いいよ。別に気にしてないから、知らなかったただもんね。じゃあ、気を取り直して。魔法の過程、つまり魔法陣。魔法陣に書かれているのは、主に3つあるの。どんな魔法を出すかという”発動魔法”はつどうまほう。どこに、いつなどの”発動条件”はつどうじょうけん。なんのエネルギーを変換するか、どのくらい変換するかなどの”変換演算”へんかんえんざんってところかな。」

「つまり、魔法陣はその3つから成ってるってことか？」

「うん、大体のところはあってるから、次に進むよ。次は魔法の放

出ね。」

「ここまでくれば解るぜ。放出するのは魔気を使って、魔法陣で魔法に直して、その直した魔法が水とか土とかで、それを出すってことだけだろ？」

「うん。ここの説明はいらないかな。でもね、ここには注意点があるんだよ。」

「注意点？」

「そう、原理と、禁忌の注意点。まずは原理からね。魔法が出てくる場所は”発動条件”によって決められるんだけど、その条件を満たしていても出せない場所があるの。それは他の人の魔気がある場所なの。」

「他の奴の魔気……」

「そう、魔法が放出するときにその魔気が邪魔して出せなくなるの。」

「てことは、イヴのあの魔法：水の魔法はいきなり人の顔を覆うようなことは出来ないのか……？」

「正解！一般の人たちみたいに鍛えてない人たちなら可能かもしれないけど、戦闘を経験してる人はほとんど不可能なの。だから、水質の魔法が最強、なんてことはないわけ。」

「おお！てっきり、水が最強の魔法なのかと思ってたよ。」

「……最強の魔法か……」

デュオンのため息交じりの小声。

「そうだよ。デュオンの魔法はまだ見たことないな。どんな魔法なんだ？」

「デュ、デュオン……？」

何故かトビさんの心配そうな声。

「ああ、もういいんだ。ヴァンはもう仲間だからな。」

デュオンは両手の革の手袋をとる。その両手の甲には魔法陣が1つずつ書いてあった。その魔法陣はどこかノスリさんのとは違った。当たり前と言えば当たり前前なのだが。

「これがオレの魔法陣だ。————物理反射《ウォン・ガロン》。」

デュオンは右手の人差し指をおれの方へ向けて唱える。

デュオンの両手の魔法陣は青紫に光り、その指先には透明の薄いガラス板のようなものが出てきた。目を凝らさなければわからないほどのものだ。

「なんだこれ？」

「触ってみればわかるよ。」

おれはその硝子盤ガラスばんに触れてみた。

っ！？

『なんだ？』

確かに触れたはずなのに、なんだろう…押し戻される。

「もうちょい強く押してみな。」

おれは言われた通りさっきとより強く押してみた。

っ！！？

「えっ…？」

さっきよりも強く押し戻される。

「もう、気づいたか？」

「押し戻す、ガラス板…？」

「…それじゃ締まらねえだろ…まあ、ニュアンスは合ってるけどな。オレの魔法は反射の魔法だ。触れたものを、”同じ力”を”作用線上逆向き”に跳ね返す魔法なんだ。」

「…っあ！あゝあ、なるほどね。それでベロリアを吹っ飛ばしたり、クナイの方向を変えたりしてたのか！」

「ま、そういうこと。」

「あれ？でもなんでベロリアの火は避けてたんだ？」

「それはあいつの魔法だったからだ。おれの反射魔法は物理的、物体を反射するんだ。魔法は反射できないんだよ。」

「でも、火は火だよな。普通の火も反射できないのか？」

「いや、物理的に熾おした火なら反射できる。…詳しく言うとな、

魔法には魔分^{まぶん}って言われるものが混ざっててな、それがオレの魔法では反射出来ないんだ。」

「なるほどね…魔分か…———ん？　そういえば、デュオンの魔法って何の魔法なんだ？」

「だから…」

「いや、反射ってのは解ってるんだけど、何の性質？…なんだ？」

「ああ、それか…それは”旧”無の性質…今でいうと”理”かな。」

「ん？　なんだそれ…それに、なんか魔法陣の感じもどこかノスリさんのとは違う感じがしたんだけど…」

「…ああ、よくわかったな。そう、この魔法陣はノスリのととは違うんだ。オレの魔法陣は”古代魔法陣”《こだいまほうじん》と呼ばれているものなんだ。」

「古代魔法陣…ん！？　それは覚えてるな。たしか、ジュセイイン・ベルグの…あ、いや…」

「…ああ、そうだ。あいつも関係してるよ。」

「じゃあ、やっぱりデュオンの親は英雄の———」

「英雄と呼ばれてた、だ。英雄じゃあない。」

「…どういうこと？」

「まあ、全部話すつもりだったからな…ヴァンはあいつの事をどれだけ知ってる？」

「確か…ジュセイイン・ベルグは古代魔法を悪用しようと、古代魔法陣を解き明かそうとしていた黒魔術師^{くろまじゅつし}をたったひとりで一掃^{いっそう}した英雄…だよな？」

「そうだ。そこまでが表《ー》に出ている話だ。」

「表…？」

「そう、世間って言った方がいかな…で、ここからが裏の、世間は知らない物語だ。あいつはその件が終わった後、家に帰ってきたんだ。奴らが研究していた資料をもつてな。家には母親と弟、そしてオレが待っていた。あいつが帰ってきた後の数日は何事もなかった。けどな、何日か経った後…事は起きたんだよ。まだ、黒魔

術師の残党が残ってたんだ。それで、そいつらがオレとあいつがない間に……母親と弟を殺したんだ……」

「……………」

「それはもう、酷かったんだぜ。家の中のあらゆるところに血が飛び散っててよ。それで、ふたりの体は磔はりつけにされてたよ……黒魔術の儀式の形でな……んで、あいつはおれにこの魔法陣を刻んだ。おれの意味は無視してな。そして書き終えた後、何も言わずに出て行ったんだ。残党を根絶やしにするためだったんだと思う。けどな、それから約1か月後に訃報が届いたんだ。あいつの友人からな。何かあったらオレの所へ連絡してくれと頼んでたらしい……まったくだよ……」

「そ、その後はどうしたんだ……？」

「その後か？その後はオレ1人で生きていたよ。この忌まわしい力とな……古代魔法ってのはな、体に刻んじまうと他の魔法が使えなくなるんだ。まあ、体に刻む以外、古代魔法陣を発動する方法は無いんだけどな。そのせいで、周りの奴等はいつの事を英雄と呼ばなくなった。おれにこの魔法を刻んだせいだな。周りの奴等はいつが自分達のために、自分達が古代魔法を使うために黒魔術師達から奪ったんだってな。」

「は……い、そこまで。」

イヴがふたり、おれとデュオンを睨みながら止めた。

「もう、まだ説明の途中でしょ？まあ、デュオンくんの魔法も確かに興味がそそられるのは解るけど、ちゃんと聞いてよ。」

「ご、ごめん。」

「では、続きに戻ります。禁忌の注意点ね。」

「でも、禁忌の注意点ってなんなんだ？禁忌ってことは使っちゃいけないんだろ？それなのに注意点って……」

「いきなり出ばなをくじかないでよ。せっかく戻したのに……」

「あ、ごめん。」

「まあ、言いたいことは解るけどね。でも、禁忌の注意点、なんだ

よ。この、禁忌っていうのはね、”オーバーロード”っていうの。」

「オーバーロード…?」

「そう。強いて言うなら”源魔過度読込”ってこと。」

「…?…?」

「えっとね、魔法を使うときに源魔を使うって言ったでしょ?」

「ああ、源魔つまり魔気だろ?」

「うん。で、魔気は何が集まったものかって覚えてる?」

「えっと、主に生命体と心力…だっけ?」

「正解!では、ここで補足説明をしようと、心力というのは生きて
いる限り無くなりません。体が反射的に危険を察知してギリギリの
ところで留まるの。————そのことを踏まえての質問です!
心力がほぼ無くなった状態で魔法を使うことは出来るでしょうか!
?」

「えっと、心力は魔気で…魔気は源魔だから…出来ない!」

おれの答えにイヴはクスクス笑う。

「残念でした〜!魔法が使えてしまうんです。」

「ええ〜…なんでだよ?」

「じゃあ、魔気の元は心力と?」

「生命力…」

「そう、その生命力だけを源魔としちゃうんだよ。」

「生命力だけ…?」

「生命力だけを源魔とすると、どんなことが起きると思う?これが
禁忌の理由なんだけど。」

「う〜ん…どうなんだろ。」

「それはね、自分の体が源魔になるの。つまり、自分の体が無くな
っていくの。」

「っえ?…無くなっていくって…」

「そのままの意味だよ。だからね、禁忌と言われているの。それに、
言っておくけど、オーバーロードなんて、そうそう出来るものじゃ
ないんだよ。無理やり魔法を使ってるわけなんだから、体にも負担

02-03:ひととき（後書き）

読んで下さり、ありがとうございました。

まあ、人物、魔法紹介ですね。

次話に続くための話ではありましたが・・・って感じですね。

ただ言い訳を一つ、前までの話の中で、人物紹介が足らなかったと確信したので、このような話を入れた、ということです。

御付き合い下さってありがとうございます。
今後ともよろしくお願いします。

03：魔法？（前書き）

こんばんは、秋藤です。

この回はタイトル通り、今回の話、つまりはトリトニアでの話の1部、前編です。

このような形で出すのはあまりしなくなりましたが、書いているうちに結構長くなってしまいう前兆が現れたので、今回は切ってみました。ちょうどいい場面でしたので。

では、このへんで。楽しんでいただけたら幸いです。

03：魔法？

剣源総覇流けんげんそうはりゅう—————剣術、体術の原点にして頂点、総本山に位置する流派。

全ての流派の起源と言われている。習う者は数多いが、その流派を受け継げる者は少ない。受け継げなかった者は各々の得意とした技を起点に各々独自の流派を展開していった。その結果が今となる。数多くの流派を生んだ結果と。そして、剣源総覇流を受け継いだ者、剣源総覇流を会得した者は現在まで4人いる。剣源総覇流を生み出した人物、剣源総覇流初代いへなほ”伊江尚 飯左衛門”。次に伊江尚の一番弟子、2代目”与左長 拾架よさなが じゅうか”、3代目”泉守 伊心いずみがみ いしん”、そして4代目”不知火 伝朴しらぬい でんぼく”。剣聖”と謳われる4人だ。

おれたちはその4代目不知火 伝朴でんぼくって人に会いに行くため、このトリトニアに向かったわけだ。列車の中での後半の話はその人物の話だけだ。ただ、結論はその人に関する情報はこれと言っていないという話で終わった。

『そんなんで、どうやって探すんだよ…』

—————高台にいる謎の人物—————

乾いた空気、晴れ晴れとした天気だ。ここまできると太陽もウザったい。風は乱暴に、荒野に砂が舞い散る。人気ひとけがない町トリトニア。

「本当にこんなとこにあいつがいるのか？…：確かに町からは何か感じるが、何かに阻害されてわからねえな。」

ここに居座り、3日目か。町にある駅にはもう何回列車が到着したとか。まあ、人は誰も降りてないんだがな。あいつの到着を待っているんだが、遅い、死ぬほど遅い。

「来たら一遍殺そうかな…：ん？列車か…もう何回目だよ…：…ん？…人か？人？こんなとこに？…」

黒いローブを纏った者に魔気が籠もる。

「鷹の目……っ!?!?…あれはステイルフォードか!?!?なんであいつがここに…?それに、あの藍髪…それにあの魔気………かったるい仕事に面白いヤツらが舞い込んできたもんだ————」

————トリトニアへ向かう人物————

大地が荒い。歩きにくいとは思わないが、風が強く、砂塵が舞う。

「トリトニアにあいつらがいる、か。」

血塗れの、血に飢えた狼。仲間を殺され、復讐を誓った狼。——

降り立った町、トリトニア。急行列車アーロンの終着駅、終点。人がいない町とはよく言ったものだ。

規模はアラマンダの半分といったところ。ほぼ全て石造りの民家。町の中心に、店が集まっている感じた。しかし、町を一周歩き回っても外には人が1人もいない。それに店の中にも人がいない、客人も店員もだ。本当に人がいない。

この町と近辺を搜索するため、おれたちは二手に別れた。おれ、デュオン、イヴ、ジル兄で町を、トビさんとノスリさんが近辺を搜索した。

そして、今は集合時間。

「ホントに誰もいないな。」

一回りしてデュオンのため息交じりのひと言。

「なんか、ここまで人がいないと不気味だね。」

「ジル兄、こんなところにホントにいるのかよ。人が1人もいないんだぜ……」

「ガセネタだったのかな?…まあ、100パーセント信頼してたわけじゃないんだけど、ある程度信頼できるスジからの情報だったんだけどな……」

「そのスジってどんな奴?」

「ステイルフォード家にちょっと絡んだ人物でね、いわゆる情報屋
って感じかな。」

「そ、それなら信頼できるか…」

トビさんと、ノスリさんが帰ってきた。

「悪い、待たせたな。」

「トビ、どうだった？」

「西の方、5、6キロメートル行ったところに森があつてよ、一応
調べては見たんだが人は誰もいなかった。それと、この町の周りは
なんかおかしいな、その森までは荒野なんだ。高い岩ばっかでなに
も生えてない。————デュオン、そっちはどうだったんだ？」
『あれ、そういえば隊長と呼んでなかったっけ…？ 任務中だけな
のか…？』

「こっちもダメだ。人すらいらないな。まあ、ここについてから感じ
ていた通りだが…」

「それに、ここに降りたやつもいなかったな。降りたのはどうやら
俺たちだけか。どうする、ジキルくん。ここを離れるか？」

「いや、ノスリさん。もうちょっと調べさせてください。この町か
ら何か感じるんです…」

一呼吸。

間が空いた。

「なら、おれは森に行ってみたいな。いいかな、ジル兄？」

「そうだな、みんなでここにいないくても大丈夫だろう。トビさん、
ノスリさん連れてってくれるかな？」

「ああ、いいぜ。」

「もちろんだ。」

「じゃあ、私とデュオンくんとジキルさんが町の探索？」

「いや、イヴもついて行ってくれるかな？」

「ん？ いいけど、ふたりで大丈夫？」

「なあに、心配ないさ。誰もいないんだからね。————デュ
オンはそれでもいいかな？」

「別にオレはなんだっていいぜ。」

「じゃあ、それで。とりあえず、解散！」

それからおれたちはまた別れ、別々に探索している。

—————デュオン・ベルグ—————

相も変わらず人がいない町並み。今オレはジキルさんと一緒だ。
なんだか、ふたりきりにされた感じではあったが…どうかな。

「なあ、デュオン？」

「ん？」

「その、古代魔法陣を見せてくれないかな。」

『ん？…どういうつもりだ？』

「まあ、いいけど。どうしたんだ、急に…？」

オレは答え、両手の手袋をはずし、ジキルさんに見せる。

ジキルさんはちらつと確認するだけで、もういいよ、とのひと言。

『いったい、何がしたかったんだ？』

「まあ、右手の魔法陣が反射を生み出すもので、左手はその位置補正ってところかな？」

「な、なんで解ったんだ？ちらつとしか見てないのに…？」

「…デュオン、オレはお前が古代魔法の使用者だってわかってたんだ。」

『っ…！？』

「な、どういう意味だよ…？」

「古代魔法を使った者の魔気には特有の違いが現れるんだ。それが
おまえの魔気から読み取れたからな、それでわかったんだ。」

「…だから、なんだよ。」

「それでな、おまえが列車の中でヴァンのやつに告白してくれただ
ろ？…古代魔法なんてもんを使ってるやつには陸くなことが起きない
からな。普通のやつなら隠したがるはずだが、それをしなかった。
おまえはヴァンにちゃんと話してくれた。」

「だから…それが何だってんだよ！」

「ありがとう…」

「……は…?」『なんで…』

「ヴァンを信頼してくれて、仲間だと思ってくれてありがとう…ただ、それだけだよ。」

「い、いや別にそんな大したことはしてねえよ…」

「…なんでヴァンが魔法を使えないか……」

『それは…』

「知りたがってたろ?ヴァンの事をさ。」

「まあ、な。オレは自分が古代魔法を使ってることを自分が認めたやつには話すようにしてんだ。その後に嫌われるようなことがあってもな…だから、魔法を教えあうことがオレにとっての信頼できるかどうかの線引きなんだ。」

「まあ、なんとなく想像はしてたよ。」

「…それでも、ヴァンのことは言えなかったのか…?」

「それは勘弁してくれよ。さすがに本部に情報を提供しようとしていた奴には話せないさ。」

『む…』

「でも、今は話せる……聞きたいかな?」

「もう、どうでもいいよ。」

「じゃあ、聞いてくれ。」

『な、なんだよ……』

「ヴァンにはある種の呪いの魔法をかけられたんだ。生まれる前かな。それで、心臓を動かすため、命の火を灯すために、獣神ゼオルの魂をヴァンの体に入れ、呪いを抑制したんだ。」

「ぜ、ゼオルの…!?…か、体に…!?…そ、そんなこととしていいのかよ!いくら王家だからって…そんな……神殺しだぞ……!」

「ああ、そうだ。神殺し、この世界の禁忌。各々の国に存在する、各々の神を殺すこと……だけどな、ヴァンはそうやって生まれた子なんだよ。」

「な、あいつが……」

「まあ、そのせいで生まれてからゼオルの魂と安定しない状態が続いてるんだ。だから、魔法が使えないんだよ。」

「……り、理由は解ったけど……そんなことって……」

「なあ、それでもヴァンはデュオンにとって……仲間かな……?」

「あ、あたりまえだろ!」

「……そうか、よかった……じゃあ、改めて、オレたちと来ないか? 魔法戦斗団体から抜けてさ。イヴにも話すつもりだ。……あいつも何か抱えてそうだしな。」

「………」 『な、何言ってやがる……』

「オレとヴァンの旅はな、ヴァンを育てるためって言ったよな? 覚えてるかな……」

「………」 『確かに覚えてはいるが……』

「この旅はヴァンの運命を懸けた旅なんだ。」

「運命を……」

「そう……ヴァンに呪いをかけた奴が言っていたそうだが、『その子供にいずれこの国を破滅に追い遣る運命を持たせた』ってな。だから、王は考えたんだ。その子、つまりはヴァンを12まで生きさせるとして、12になった時、ヴァンの命を獲るってな……」

「な、なんでせつかく生まれてきたヴァンを殺すんだよ!？」

「それは……オレにも全ては解らない……ただ、もう、運命ってやつに縋^{すが}りたかったのかもな……自分の息子と自国の民の命……国王として、ひとりの親として、選べなかったんだと思う。理性をとるか、感情をとるか……」

「ヴァ、ヴァンは今11才だよな? い、いつ生まれたんだ? いつ12になる?」

「……あと、半年だ。」

『嘘だろ……おい……あと半年でヴァンが殺される……』

「この旅はそういうもんなんだよ。」

「………」

返事はしなかった。返事は出来なかった。

あまりにも重く、大きく…自分の力を遥かに超えている感じがした。

ヴァンがあと半年で、自分の親に殺される、運命に殺される…あまりにも唐突で、不意に、出し抜かれた感じた。

ジキルさんは何も言わなかった。黙るという、卑怯な方法をとったオレに何も言わず、唯々《ただただ》見つめているだけだ。

沈黙。

圧迫。

畏縮。

「そうだ、この町の事調べないとな…デュオンはそこで座ってな。ちよっと調べて…」

突然何者かの気配がした。

「お二人さん。ご案内しましょうかね。」

ふたりが振り返ると、そこには影があった。そのまんま、人の影が。背は高い。2メートルといったところ。薄っぺらくはない、人の形をしている。

「なんだお前は。」

ジキルさんの目が変わった。冷徹な、強みのある目が変わった。オレも本職に戻る。

「いやいや、だから、ご案内しましょうかと思ってね。この町、トリトニアへと。お二人さん、いやお連れさんたちもそうですが、会いたいんでしょう？ 不知火さんに…」

「お前、知っているのか？ 不知火 伝朴がどこにいるのかを…」

「ははは、もちろんでございますよ。この町に御出ですよ。ですからご案内しようと、こうして迎えに来たんですよ。」

「迎えについて、ここがトリトニアじゃねえのかよ。」

「そうですよ。違います。ここはトリトニアであり、トリトニアではない。」

その影は右手を広げる。その広げた空間にドアが現れた。

「……この先が、トリトニアです。」

「デュオン、どうだと思う？」

「確実ではありませんが、危険な感じは受けませんね。それに、手がかりがない現状にしたら、好転の手になるかもしれませんね。」

『スイッチ入ったな。これが子供の反応とは思えないな。それにいい状況判断だ。』

「じゃあ、案内してもらおうか。」

「では改めて、お二人さんご案内します。」――――

鬱蒼とした森だ。日差しは木によって遮られ、あまり入ってこない。動物や昆虫が植物の影に隠れ、蠢うごめいている。危険な感じはしない。ゆっくりとした、静かな森だ。

「やっぱり、人はいないな。」

おれはつぶやき、改めて実感する。本当に人がいないのだと。

ここで、何もしないのも暇なので、みんなに質問することにした。

「なあ、なんでみんなは魔法戦斗団体に入ってるんだ？」

みんなも人探しは無駄だろうと確信し、座り込む。

おれの質問にはノスリさんが答えてくれた。

「俺とトビは同期でな。一緒に加入したんだ。もう20年くらい前になるか。俺たちは小さな村で育ったんだが、そこに1人の魔法戦斗団体の人がいてな、村の英雄だった。部隊の隊長とか、特に秀でた人ってわけではなかったんだが、それでも村のみんなの英雄だった。俺たちはその人に憧れて育ち、現在に至るわけだな。」

「すごい人なんだな。それにノスリさんもトビさんもスゴイな！夢を追いつけて、叶えちゃうんだもんな。」

「まあ、な。それにしてもあの頃は加入するのにも一苦労だったんだぜ。入団テストも厳しいものばかりだった。だが、な。最近はこちらの多いが多くなってきたけどな。」

ちらりとイヴを見る。

「心強いのに変わらないけどな！」

期待を込めた笑顔、だが、それも一瞬だった。

『……っ！！』

「トビ！」

「ああ、わかってる。気づくのが遅いのはお前だよ。」

「…悪い…：イヴ、ヴァンを連れて町に戻ってくれ。」

「……えっ？」

それも一瞬。イヴはその一瞬で何かを察知し、頷く。

「ヴァンくん、行こう。」

「あ、ああ。トビさん、ノスリさん、気を付けてな。」

そう言わなければならない、そんな気がした。

その言葉を残し、おれとイヴは町に戻る。

森を抜けた後、イヴに尋ねた。

「なあ、ふたりは何であんなこと言ったんだ？」

「…それは、誰かの魔気を察知したから。つまりは何者かの気配を読み取ったからだよ。」

「人がいたってことか？じゃあ、町の人間かも…」

「それはわからないけど、でも、私たちを町に戻すくらいだから違うと思うよ。」

「イヴは解らなかったのか？」

「私はあんまり気配を読み取るのは上手くないから。それに、実戦の勘ってやつもないからね。まだ難しいんだ。」

「そうなのか。」

「でも、人並みにはわかるよ。ただ、あのふたりがスゴイだけなんだよ。」

「頼りになるのか。」

「そう。だから私たちは速く町に戻らないと…っ！アキュリア！渦水！」

イブの手から水が出て、円形の楯となる。

その楯で防いだものは火だった。だが、おれには火の斬撃に見えたが。

その火の先には人がいた。50メートルくらい先に人が。

「ヴァンくん。私から離れないでね。」

「え？」

「あの人、きっと強いから。」

その言葉を聞いた直後だった。さっきまで遠くにいた人が、目の前に。

「死んでくれ。」

短い言葉だった。冷たい言葉。その言葉と同時にその剣がイヴに斬りかかる。

だが……

キィイイイン…

その剣がおれの刀と交わる。

「それはないだろ。いきなり出てきて、死ねだ？何言ってるの？」

「ああ？雑魚は引っ込んでろよ。」『コイツ魔気も感じられないのに、オレの剣を止めやがった…』

そいつは白髪で、年は18歳といったところ。高さは170センチくらいか。服装はゆとりがあり、白をベースに炎をあしらったデザイン。腰には2つの剣を携えている。1つはおれの刀と錨迫り合いになっている。

「銚水！」
ほうすい

イヴの手から現れた水は瞬時に水でできた銚ほことなる。

「ヴァンくん避けて！」

イヴの声と同時に水の銚は放たれる。

おれはギリギリでかわす。本当にギリギリだった。というか、髪の毛が少し斬られたかもしれない。

『言うの遅おそえよっ！！』

「玉炎。」
ぎょくえん

さっきまで錨迫り合いをしていたはずなのに、そいつは4、5メートル離れていた。

そして、その体は丸い炎で覆われていた。

おれの頭を掠かすめた銚が丸い炎に襲い掛かる、いや、吸い込まれた

ように見えた。

「くっ…」

「残念だったな、水使い。どうやら魔気はオレの方が上らしいな。」
今ので思い出した。列車の中で何気ない会話の中で魔法の相性について聞いた。魔法の性質、魔質^{ましつ}。その種類は今のところ8種と3種、合計11種だ。だが、その種類の中で相性というものは正確には存在しない。全ての優劣は大概魔気で決まるということだった。魔質本来での優劣は、魔気がほぼ同等の状態で起こるというものだった。

それを今、実感し、見たんだ。

火と水、水と火。

これは、この世界の魔法、魔気を理解するのに、非常にわかりやすい例だ。

普通は火は水をかければ消える。水の中に火種を落としても消える。

しかし、ここの世界は違う。厳密に言えば魔法でできたモノは違う。

魔気の強い火はそれ以下の魔気の水では消せない。魔気の弱い水の中にそれ以上の魔気の火を入れれば、その火は消えることなく沈む。

「魔法、か…」

呟いた瞬間、一呼吸も間を空けることなく、そいつの蹴りをくらう。

「ガッ!？」『コ、コイツ…』

不覚にも気を取られていた、その隙を狙われた。懐に入った蹴り。蹴りの威力は剣士のものとは思えないほど強烈で、5、6メートル吹っ飛ばされた。いや、この場合は吹っ飛ばされた距離よりもダメージの方が重要で、立てない。

吐血。

骨折。

内臓破裂。

意識が朦朧とする。

かろうじて見えるものは、いや、意識が飛んだ――――

……光が、音が、声がおれを目覚めさせる。

体が硬直した。体の痛みもちろんこの要因だが、それ以上に目の前の光景が原因だ。

右にいるひとりは立ち、左にいるひとりは座り込んでいる。

そいつは立っていた。左手に持っている剣を座っているイヴに向けて。

「おお？起きたのか。よく見とけよ、人が死ぬ瞬間を……」

イヴの目――――その目は、おれには到底生きること諦めている目には見えなかった。

体に、力が籠もる。

何故だろう、ここにいるのは――――

何故だろう、後ろにイヴがいるのは――――

何故だろう、目の前に刃があるのは――――

刃がおれの懐に向かってくる。火を纏った刃だ。

おれの手には何もない。守るための刃も、攻めるための刃も、刺し違える刃も――――

体に、そいつの、刃が――――

03：魔法？（後書き）

どうも、読んで下さってありがとうございました。

今回は、物語としてはあるまじき行為なんですかね、語り手をコロコロ変えました。というより、変えていかないと書けなかったんです。

頑張って時間軸はずらさないようにやっているつもりなんです・・・がね。

話は考えていると、活動報告で言いましたが、ここまでの話というわけではありません。トリトニアの話、いやその後も考えてはいるんです。

気づきました、長いですね、すみません。

引き続き、応援してくれたらありがたいです。

これからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7478p/>

運命に綴られた世界

2011年2月19日23時10分発行